（翻　訳）

マルサスの『経済学原理』の「本文概要」

柳　田　芳　伸

まえがき

誤訳，あるいは悪訳の誹りを前もって覚悟して，ここに訳出を試みようとするのは，1820年の4月の初めにマルサス（Thomas Robert Malthus）によって世に問われた初版『経済学原理』（以下，『原理』と略記）に収められている「本文概要（sumarry）」（以下，「概要」と略記）の全文〔T. R. Malthus, *Principles of Political Economy*, 1st ed. (London: John Murray, 1820), pp. 523-92〕である。初版『原理』は目次を別にすれば，「本文」（522頁）とこの「概要」（70頁）と，それに「索引」（9頁）とから構成されている。周知のように，このうちの本文ならびに索引のほぼ[1]全訳は，吉田秀夫訳『マルサス経済学原理上・下』（岩波書店，1937年—以下，「吉田訳」と略記），あるいはまた小林時三郎訳『マルサス経済学原理上・下』（岩波書店，1968年—以下「小林訳」と略記）において成し遂げられている。しかし遺憾ながら，両名訳書はともにおそらくは紙幅の都合から，「概要」の翻訳については，これを断念，省略してしまっている[2]〔吉田訳上巻3頁，凡例(9)，および小林訳上巻9頁凡例二を参照〕。本訳がこの不全を補い，初版『原理』の完訳にいささかでも裨益するところあるなら幸いである。

ところでこの「概要」はこれまでたんに「『本文』の文字通り忠実詳細な再述である」[3]とみなされ，まったくと言っていいほど関心を引いてこなか

ったと推断される。しかしながら近年，斯学（しがく）の泰斗であるプレン（John Michael Pullen）が「この概要は『経済学原理』を理解する上できわめて貴重である。マルサス自ら概要が『有益とみなされるであろう』と述べているし，当時の1評者はそれが『非常に完全・貴重な概要』であり，かつ『この種の書物における見事な見取り図』であると書いている」[4]と論及するにとどめず，さらにはすすんでこの『概要』を「書くに至った時マルサスが公刊前の本文を，第2版の準備に向けてすでに修正し始めていた」[5]と主張するに至って，「概要」はおろそかにはできない原資料の1つとして脚光を浴びてきているとみてよいであろう。ことに初版『原理』が，1949年にマルサス一族の末えいのブレイ（R. A. Bray）からケンブリッジのマーシャル経済学文庫に寄贈された（小林訳下巻訳者解説413頁）「修正手稿（Malthus' Manuscript Revisions）」（以下，「手稿」と略記）をへて2版『原理』（1836年）へと改訂されていく過程を辿り直す[6]にさいしては，この「概要」の参照を欠かすわけにはいかないであろう。かりにいま初版の序文にある1819年12月1日という日付を本文の脱稿の月日と解する[7]なら，その後初版の実際の刊行に至るまでの約4ヶ月の間に，マルサスが思慮を幾らか変更し，その一部を「概要」の中に盛り込もうと努めたとの推測も成立の余地をもってくるであろう。

たとえば小林氏の明察によれば，マルサスは18年11月には既に初版『原理』の草案を書き終えていたけれども，爾後もその「理論の公表にたいしてまだ若干の不安をもっていた」（小林訳下巻訳者解説403頁）と推察され，またそのさい，証左の1つとしてマルサスが19年9月10日付でリカードウに宛てた，「私は最近最初の部分を終らせつつあったとはいえ…まだ4分の1か，5分の1かは書かねばならないとおもいます。また別々の部分を別々の時期に自然の順序に従わずに書いたものですから，印刷にまわせるようになるまでには，まだ多くを削ったり加えたりしなければなりません。2月ないし3月以前に終えることはまず期待できません。」[8]という書面を挙証されている。それに，マルサスが23年と27年との2度にわたってロンド

ンの書肆のマレ（John Murray）に第2版（ちなみに2版『原理』には「概要」は付載されていない）の出版を懇請している[9]ことをも加味するなら，マルサスが初版刊行前後において早くも想の練り直しを重ねていたと想定しても見当違いではないであろう。

事実，たとえば「概要」においては，目次や本文の節の見出しとは幾分か異なった見出しが散在しているし[10](通し番号48，141，229，257)，また「手稿」に至って若干の要約が削除されてもいる[11](通し番号103－108)。もとよりこうした細事はまったくとるに足らないことかもしれないけれども，それらが初版『原理』の改訂の過程のおいていかなる意味をもっていたのか，あるいは無意味であったのかという点の解明はけっしてないがしろにはできないであろう。とはいえこれを本格的に究明していくには，少なくとも同時に，「手稿」や『価値尺度論』（1823年）を中にはさんでの，『原理』の両版の比較考量というとほうもない大作業を要するであろう。それゆえこの難題には別な機会にとりくむことにし，ここではとりあえず次のような凡例のもとに，「概要」の邦訳を試行するにとどめておきたいとおもう。

凡　例

1．「概要」に対応する本文の当該部は原則として原典の表記している頁を小林訳と対照させて記載したが，そのさい訳者の判断で訂正したところもある。
2．原文中のイタリック体で表現されている個所は傍点で示している。
3．（　）は便宜上訳者が補ったものである。

マルサスの初版『原理』の「概要」

番号	概　要　の　訳　文	原典 頁	原典 行	小林訳 頁	小林訳 行
	小林訳上巻（第1章ー第3章）				
1.	**本書の内容の概要**				
2.	**序論**	1		19	
3.	経済学という科学は数学よりも道徳学及び政治学により多く類似している。	1	1	19	1
4.	経済学が関係する諸主題を一覧すれば得られるこの結論は，その注意の多くをこの研究にあてている者の間に広く行き渡っている見解の相違によってさらに強化される。	2	8	20	1
5.	エコノミスト（マルサスは2版『原理』で，「ケネー学派のフランス経済学者」と述べている，吉田訳上巻41頁注）とアダム・スミスとはなお一層重要な他の問題については一致していた。けれども，経済学上の若干の重要な問題に関しては見解を異にしていた。	2	14	20	4
6.	もっとも高名な著述家の間でも，見解の異同は引きつづき，きわめて重要な問題について広範に存在している。	3	16	21	6
7.	これらの問題を正確に決定することは，実際的重要性を大いにもっている。	4	7	21	25
8.	経済学上の主要な著述家の間での一致は，この科学を実際に適用するさいそれを権威づけるのにとても望ましいものである。	4	17	22	4
9.	この科学の現状において，重要ではあるが依然として論争されている幾つかの争点に白黒をつけようとする努力は，新しいかつ完全な論議を組立てようとする試みよりはずっと有益であろう。	4	27	22	10
10.	経済学に関する科学的な著述家の間にみられる見解の差異の主因は単純化し，かつ一般化しようとする性	5	30	23	10

	急な試みにある。				
11.	単純化しようとする欲求はその帰すうとして，観察された結果が生じるときには，1つ以上の原因の作用を認めざるをえなくする。	6	17	24	5
12.	なんらかのの現象の説明をするのに必要であるよりもより多くの原因を認めてはならないことをわれわれに教えてくれるニュートンの通則は，必要である諸原因を認めなければならないことを示している。	7	6	25	1
13.	単純化しようとする同様の傾向は制限および例外の拒絶をもたらす。	7	22	26	2
14.	制限および例外の必然はアダム・スミスが節倹ならびに貯蓄に関して打ち立てた学説で例証される。	8	14	26	14
15.	同様の必然は土地分割に関する通則において例証される。	9	22	29	1
16.	経済学者の間における早まった一般化の傾向は，またその結果として彼らの理論を経験によってためしてみることを嫌忌させる。	10	18	30	5
17.	哲学の第1の任務は事物をあるがままに説明することである。	11	6	30	16
18.	事実への行き届いた注意は理論の累積をさけるためにも，また正当な理論を確証するためにも不可欠である。	11	32	31	13
19.	経済学は本質的に実際的であり，人間生活の日常事に適用されえる。	12	7	31	17
20.	幾人かの著名な経済学者は経済学の一般的通則に例外はあろうけれども，それに注意を払う必要はないと考えている。	13	18	33	5
21.	しかしきわめて望ましい一般諸原則が信用と普及とを獲得するには，達成しえる最高度の正確さとともにもっとも完全な誠実さを必要とする。	14	8	33	16

22.	もう1つの群の人々は経済学において既に成し遂げられているもので満足し，しかもさらなる研究がもたらす実際的結果がすぐさまみられない場合には，こうした研究をためらうようにおもわれる。	15	10	34	17
23.	こうした傾向がもしも過度に至るなら，科学におけるあらゆる改善を根底からくつがえしてしまう。	15	22	35	7
24.	経済学における大部分の命題は人類の知識のいかなる他の部門の命題よりも何のためにという試験にたえるであろう。	16	13	36	3
25.	どんなに困難であろうとも，よりすすんだ研究がこの科学の改善および完成のために，かつそれよりえられるようにおもわれる実際的利益のためになされるべきである。	16	22	36	9
26.	期待される結果が確実である場合と，確実ではない場合との間に，かなり正確に一線を引くことはたいへん重要である。	17	6	37	1
27.	必要な研究のための余暇を有しない実際的為政者は健全な思慮にみちびかれて，他の人々の余暇を利用するのに尻込みすべきではない。	17	27	37	12
28.	不干渉の原理は実際においては必ず次によって制限される――第1に，主権者に属することがあまねく認められている経済学と関連した幾つかの義務によって。	18	14	38	4
29.	第2に，修正されるか，あるいは撤廃される必要のある悪しき規則がほとんどすべての国に偏在していることによって。	19	8	39	2
30.	第3に，課税の必要によって。	19	23	39	10
31.	まったくと言っていいほど干渉しないということの妥当性は，為政者または医師のもっとも幅広い専門的知識の使用を少しも排除するものではない。	20	16	40	5
32.	本書の特別な目的の1つは特定の現象の生起に随伴するすべての原因を考察しようと努めることによって，	21	5	40	16

	経済学の一般的通則を実際に適用することである。				
33.	こうした対処法はアダム・スミスが終始さけているわけではない１つの危険であり，単純化の傾向から生ずる危険とは正反対の危険に陥るおそれもある。	21	11	41	2
34.	両極端の間の中項が真理に到達するという見地から目指される点そのものである。	22	7	42	1
35.	心底から論争をさけようと願ったけれども，リカードウ氏の名著である『経済学および課税の原理』には特に，かつ大いに触れざるをえなかった。	22	22	42	10
36.	それが論じている諸問題はとても重要であるから，できうるならその諸問題は解決されるべきである。	23	23	43	13
37.	**第１章　富の定義および生産的労働について**	25		25	
38.	**第１節　富の定義について**	25		25	
39.	反対を一切うけない定義を与えることは容易ではないかもしれないけれども，富に１つの定義を付与することは望ましい。	25	1	25	1
40.	もしも著述家がその用語を好き勝手に定義し，くわえてつねにその提示した意味でそれらを用いるなら，研究は不適当な，もしくは，異常な定義によって台無しになるであろうから，こうした自由は疑われて然るべきであろう。	26	4	46	4
41.	エコノミストおよびアダム・スミスの体系の比較的すぐれた利点は主に富についてのかれらの異なった定義によっている。	26	22	46	15
42.	エコノミストは富という用語をあまりに狭い範囲内に限定してしまっている。	27	1	47	4
43.	ローダーデール卿やその他の著述家たちはあまりに広げすぎた定義を与えてしまっている。	27	13	47	11
44.	もっとも自然に引かれるとおもわれる線は物質物と	27	29	48	2

	非物質物とをわけへだてるものである。				
45.	アダム・スミスの富の定義は物質的生産物に限定しているけれども，反論をまったくうけないわけではない。	28	10	48	10
46.	富の1つの定義として，人類に必要で，有用な，あるいはまた愉楽な物質物を提示する。	28	24	49	1
47.	この定義を適用すると，豊かな国と富裕な人民との間に有用な区分がなされるであろう。	29	10	49	12
48.	**第2節　生産的**（本文では，「生産的および不生産的」となっていた）**労働について**	29			
49.	生産的労働の問題はエコノミストの体系とアダム・スミスの体系，この両者における富の定義によっている。	29	1	51	1
50.	富をどのように定義しようと，富を生産する労働に生産的という用語を充てることはあきらかに有益である。	30	6	51	8
51.	生産的労働についてのアダム・スミスの定義はある人たちには広すぎると，また別な人たちにはあまりに狭すぎると考えられてきた。	30	17	51	13
52.	さまざまな種類の労働に関しての分類が一切なされないから，諸国民の富の性質ならびに原因についてのわれわれの研究をすすめていくのは難しい。	30	26	52	4
53.	こういった定義は不可欠である――第1に，資本の性質，および国富を増進していくさいにそれが果たす効果を説示するために。	31	9	52	12
54.	第2には，貯蓄の性質および働きを浪費とは峻別して説明するために。	31	26	53	4
55.	第3に，生産と消費との欠かせない均衡に都合よく作用する諸原因を説き明かすために。	33	21	55	5
56.	そして総じて，別な国が衰退しているのに，他方で	34	14	56	3

	はなにゆえにある国が隆盛しているのかを解明するために。				
57.	もしもたんなる個人的奉仕が商人や製造業者といった労働者と同様に富を生産すると想定されるなら，封建時代このかた増大しているヨーロッパの富裕や、繁栄はほとんど説明がつかないであろう。	34	28	56	11
58.	かりにさまざまな種類の労働の間になんらかの区別を必要とするなら，つぎの設問はこの区別がどんなものでなければならないかである。	35	31	57	14
59.	エコノミストが採用した区別では，通用語でいうなら，富の程度の差異から生じるとみられる色々な国民のさまざまな外観を説明することはできないであろう。	36	6	58	2
60.	さまざまな種類の労働におけるなんらかの区別が不可欠であることを立証しようと努めたさい，エコノミストへの反対所見はすでに議論済みのところである。	37	8	59	1
61.	さまざまな種類の間の区別はアダム・スミスの著作の礎石である。	37	15	59	5
62.	しかしながらアダム・スミスの推論を無効にはしないであろうアダム・スミスの区別とは別の区別がおこなわれえたであろう。	37	31	59	14
63.	すべての支払われた労働は価値を生産すると呼称されるであろう。ただしそれらの成果の価値が支払われた価値を上回るに応じて，生産的な程度を異にするであろう。	38	4	59	17
64.	この原理にしたがえば，概して農業労働がもっとも生産的で，製造業労働がそれにつづき，そしてたんなる個人的奉仕が最少であるであろう。	38	18	60	8
65.	この主題の以上のような考察方法は労働を2種類に分けることはなく，生産性の等級を確立するであろう。	39	12	62	7
66.	この体系にもとづけば，アダム・スミスの不生産的労働者は最低級の生産性と評定されるであろう。	39	31	63	1

67.	生産物の質ではなく，労働への支払いを生産性の基準にしていることがこの体系にたいする主な反対論である。	41	4	65	4
68.	しかももしも一旦物質（matter）を捨て去るなら，われわれはこの基準を，つまり苦痛をさけたり，楽しみを手に入れたりする人間の努力はいずれも生産的労働であるということを採択しなければならない。	41	1	65	13
69.	さらにもしも本当にこの基準を採択するならば，まったく同じ種類の労働は支払われば，生産的となり，また支払われなければ，そうでなくなるであろう。	42	22	66	10
70.	不生産的労働者は需要者として間接的には富の生産において大きな重要性を果たすけれども，的確には，かれらの労をつぐなう富を創造するとは言い難い。	43	5	67	2
71.	物質であるものと物質でないものとの間に線を画するアダム・スミスの区別はおそらくもっとも有益で，かつ反論の余地がもっとも少ないものである。	44	18	68	8
72.	蓄積が可能であるということは富についてのわれわれの通常の概念にとって欠かせない。	44	31	68	15
73.	的確な評価を下すことができれば，いかなる種類の労働によって獲得されたにせよ，その富の高を評価することは可能である。	45	20	69	9
74.	物質的生産物に実現された労働が蓄積可能で，かつ明確な評価をも下しうる唯一の労働である。	46	6	70	1
75.	楽器ならびに楽器によって演奏される曲に関するガルニエ氏の反対所見への回答。	46	11	70	3
76.	政府の使用人に関するガルニエ氏の異見への反論。	46	28	70	12
77.	ある不生産的労働は生産的労働よりもはるかにずっと有用，かつ重要ではあるけれども，国富に関する総計の本体とはなりえない。	48	9	72	1
78.	富の定義を物質的に限定するなら，生産的労働とは富	49	16	73	4

	を生産するかの労働であり，また生産された物の価値で評価されるほど直接的に富を生産する労働のことある。				
79.	以上の議論のねらいは厳密な区別を施すことではなく，有益な分類へのご賛同をまえもってお願いしておくことである。	49	29	73	10
80.	**第2章　価値の性質および尺度について**	51		75	
81.	**第1節　価値のさまざまな種類について**	51		75	
82.	2種類の価値が一般に認められている。 ── 使用価値，および交換価値である。	51	1	75	1
83.	価値という用語はごく稀に物のたんなる効用を意味するものと理解される。それゆえもし価値についてのこうした解釈が保持されるなら，それは使用上のという付言なしには断じて適用されてはならない。	51	6	75	4
84.	交換価値はある商品を別な商品と交換する意志と能力とにその基礎をおいている。	52	6	76	5
85.	まず第1に，かりに自然がいま消費に先立って引き起こるような商品の分配をもたらしたとするなら，それらの交換価値は未知のままでおわるであろう。	52	16	76	10
86.	交換はある品物（article）をより求められる別な品物にたいして与える能力と意志とを意味しているばかりか，求められた品物をもつ所有者にそれと交換しようと提起された品物への相互的需要があることを意味してもいる。	52	23	76	13
87.	この相互的需要があるときには，他の品物に給されるある品物の量は所有したいという欲求や，所有を入手する難易にもとづいてそれぞれに下される相対的評価に左右される。	53	11	77	8
88.	欲求や能力がちがっているので，このようになされる取引きは当初はお互いにきわめてまちまちであろう。	53	18	77	11
89.	しばしば用いられるあらゆる商品の現在価値が次第	54	1	78	3

	に確立され，それぞれの商品は幾分かは価値の代表者となり，また尺度にもなるのであろう。				
90.	しかし大きな市の場合を除いては，相互的需要の度重なる不足が原因となって大障害が商品の平均価値（本文では，「相対価値」となっている）を測定するのに立ちふさがるであろう。	54	24	79	1
91.	この相互的需要を確保するために，各人はごく一般的に所望されるなんらかの商品を手元に保持しようと努力するから，その商品はその人が求めるものとの交換のさいに拒絶されることはめったにないであろう。	55	13	80	6
92.	牧畜諸国の間では，家畜を飼育することの手軽さや，家畜がまぎれもなくしばしば交換の対象になってきたという理由から，家畜がこの目的に用いられた。	55	31	80	16
93.	交換の媒介物および価値の尺度として採択される商品は頻繁に用いられるとともに，その価値がよく知られていなければならないことが必要である。	56	8	81	4
94.	貴金属が交換の媒介物および価値の尺度にとくに適合しているにもかかわらず，貴金属ははじめて発見されたとき，メキシコではその目的に用いられることはなかった。	56	14	81	7
95.	鉱石を溶解したり，精錬したりする技術がはるか昔から知られてきた旧世界では，貴金属はその固有な諸性質のゆえにようらん期において交換の媒介物および価値の尺度に一番適した商品として指定された。	57	8	82	5
96.	それが一般的な価値尺度としてえらばれたとき，それはほとんどいつも指定された品物となるであろう。そしてその商品と交換される貴金属の量がその名目価値と呼称されるのが正当であろう。	57	24	82	14
97.	この名目価値はときには価格という用語で呼ばれてきている。それはいま述べたように価値という用語のもっと限定した意味を表わしている。	58	1	83	2
98.	名目および相対価値の尺度の採用は社会の進歩にお	58	17	83	10

	ける最重要な段階であった。				
99.	商人が頭に入れておく必要があるのは財貨の名目価値，つまりその価値だけである。	58	25	83	13
100.	しかし貴金属はさまざまな国々，あるいは異なる時期における物の交換価値（手稿では，「名目価格」となっている， Pullen ed., *op. cit.*, Vol. II, p. 285）の尺度としてはまったく無用である。	59	8	84	4
101.	なお一層の情報がなければ，名目賃金および所得だけではそれらの良否を判断しかねるであろう。	59	15	84	7
102.	名目賃金および所得によって支配できるであろう生活の必需品および便宜品の量を意味している真実交換価値（手稿では，「内在的真実交換価値」となっている，Pullen ed.,*op. cit.*,Vol. II, p. 285）と称してもよい1種のなんらかの評価が要望される。	60	1	85	4
103.	いま述べたように，真実交換価値の正確な尺度がたいへん望ましいとはいえ，獲得することはできない。	60	19	92	1
104.	こう説いたからといって，真実交換価値の別な定義を差し出すのは間違っている。そうすると，原価と価値との間の重要な区別を混同してしまう。	61	1	93	1
105.	使用価値を除けば，交換に関連する意義以外の価値の意味はない。	61	4	93	8
106.	2つの国の富を比べ合わせたり，あるいはまたさまざまな場所や時代における貴金属の価値を評価したりするさいに，真実交換価値と名目交換価値との区別は絶対欠かせない。	61	28	93	16
107.	そうすると，3種類の価値があることになる，――1．使用価値，すなわち物の効用。2．名目交換価値，とりもなおさず貨幣価値。3．真実交換価値，つまり必需品，便宜品，および労働での価値。	62	17	94	8
108.	これらの区別はアダム・スミスの主要な区別であり，彼の体系からの産物である。	62	29	94	14

109.	**第2節　需要および供給について，それが交換価値におよぼす影響を論ずる。**	63		96	
110.	需要および供給という用語は常用されてはいるけれども，正確に用いられていない。したがってそれらが行き渡っているゆえに，さらに立ち入っていく前に主題のうちのこの部分を明らかにしておくことが必要である。	63	1	96	
111.	需要とは買う能力と結びついた意志であり，供給とはそれらを売る意図と結びついた商品の生産のことであると定義してもさしつかえない。価格の変化がある場合には，おのずと需要または供給に影響をおよぼす幾つかの原因を調べ出すことができる。	64	16	96	10
112.	価格は需要だけで，あるいは供給だけで決定されのるではなく，それらの互いの比例によって決定されるということを銘記しておかねばならない。	65	1	97	1
113.	用法の1つの意味において，需要はつねに供給に等しいと言ってもよい。しかし同じ意味においてそれが価格を決定するわけはない。	65	8	97	10
114.	ある特定の商品に関して買う意志と能力とが多く存在していればいるほど，それにたいする需要はますます大きくなり，またいよいよ強くなる。	66	4	98	13
115.	商品の価格は大きいか，もしくは強い需要を換起したり，あるいは不要にする諸原因に左右される。	66	23	99	6
116.	品物の購買者の数の増加，あるいはその供給の減少がその価格を引き上げるであろう。購買者の数の減少，またはその多大な供給がその価格を引き下げるであろう。	66	29	100	1
117.	この原因の1番目の部類はより大きな強度の需要を，また2番目の部類はより小さな強度の需要を換起する。	67	5	100	5
118.	供給が購買者の欲望と比べてどんな状態にあるにしても，購買者がより強い需要を形成する能力と意志とを有していないなら，その価格は上昇しえない。	67	8	100	7

119.	もしも生産費が増加されるなら，求めるものを獲得するのにより多大な犠牲を甘受し，より強い需要を形成するであろう人々だけがその供給を享受しうるにすぎない。	67	31	101	2
120.	もしある商品が購買者の数に比べて多大であるならば，需要または犠牲の同じ強度は不要となる。	68	30	102	1
121.	もしも生産費が低減されるなら，不用な供給過剰はいつもその価格が比例して下落しないということを伴っているであろう。	69	13	102	9
122.	価格の騰貴が引き起こるときはいつでも，このような騰貴なしには消費者の補充がなしえないことに起因している。そして価格の下落が引き起こるときは，いつもそれを抜きには供給が消費を上回ることのないようになしえないことに因由している。	70	16	103	9
123.	以上の議論において，需要および供給という用語に新しい意味は一切与えられていない。著者のねらいは，それらが市場価格にたいして用いられるとき，これまでいつも理解されてきた意味で理解されねばならないということになる。	71	10	104	8
124.	**第3節　生産費について，それが交換価値におよぼす影響を論ずる。**	72		107	
125.	価格が需要および供給によって決定されるとする体系はそれを生産費に帰する体系と多くの点ではお互いに関連しているけれども，本質的には異なっている。	71	2	107	1
126.	売買契約および販売のあらゆる取引においては，その生産費とはまったく別個に価格を決定する原理が厳存している。	73	13	108	1
127.	このことはあらゆる独占商品に関して認められ，わけても粗生産物の市場価格についてあてはまる。	73	24	108	7
128.	変動がもっとも少ない商品については，生産費はその供給の必要条件であるゆえに，たんに価格に影響をおよぼしているにすぎないということがわかるであろう。	74	14	109	8

129.	需要および供給の原理はアダム・スミスが市場価格を呼んだものと同様に自然価格と呼んだものをも決定する。	75	4	110	6
130.	このことは生産費の変更のさいに価格を変える直接的で特殊な原因に留意すれば立証される。	75	8	111	1
131.	供給および需要という支配的原理に副次的に作用するということを除けば，生産費はまったく無用であるようにおもえる。	75	20	111	7
132.	こうした状況はあらゆる種類の奨励金が価格へおよぼす影響によって例証される。	76	20	112	7
133.	その高を制限することで銀行券に与えられる価値は，金の生産費がその供給に影響をおよぼす限りにおいてのみ，その価格に影響を与えるにすぎないということを示している。	77	28	113	12
134.	生産費が価格におよぼす影響を調べ出す正確な方法は求められる物の供給の必要条件としてみてみることである。	78	22	115	1
135.	この供給の必要条件の第1は使用された労働への支払いである。	79	11	115	11
136.	2つ目の条件は資財（stock）へのふつう利潤への支払いである。	80	9	116	14
137.	3番目の条件は，その商品の価格が耕作されている最劣等地を除くすべての土地への地代を支払うほどでなければならないことである。	81	13	117	17
138.	これらの諸条件をみたす価格はアダム・スミスのいう自然価格であり，もっと簡潔な定義が許されるなら，必要価格と呼ぶのがよりふさわしいであろう。	83	8	119	14
139.	商品の自然または必要価格はそれを規則的に市場へもたらすのに必要な価格である。	83	25	120	7
140.	市場価格と同じように，自然および必要価格も需要	84	19	122	5

	および供給によって決定される。				
141.	**第4節　交換価値の1尺度と考えられる商品に使用された**（本文では，「投じられた」となっている）**労働について**	85		123	
142.	アダム・スミスは価値の1尺度として労働を提議したさい，いつもそれを同じ意味で用いてはいない。	85	1	123	1
143.	労働が商品の生産に使用される労働量の意味で用いられるなら，それは交換価値の1尺度としては根本的に欠陥のあるものである。	85	18	123	10
144.	この意味で，それを積極的に用いることはできない。なぜならかりにあらゆる商品がそろってそれらの生産により多くの労働を要したとしても，それらの交換価値は同じままであるであろうからである。	86	1	124	1
145.	相対的に理解するなら，社会のもっとも初期段階において，「さまざまな物を獲得するのに必要な労働量の間の比率が，それらを交換するにあたってなにかの規則を提供しうる唯一の事情である」（水田洋訳『スミス　国富論』〔河出書房，1965年〕上巻45頁）というのは事実に反している。	86	27	125	1
146.	社会のきわめて初期には，前払い（advances）が幾つかの生産物には欠かせない。こうした前払いが用いられている時代には，価格の必要要素は労働とはまったく無関係に形成される。	87	1	125	5
147.	その結果，「商品はその生産に投ぜられる労働量に大小がなければ価値の相違はけっしてない」（堀経夫訳『リカードウ全集Ⅰ』〔雄松堂，1972年〕66頁）と明言する通則は「社会の初期の段階においてさえ適用できない」ということになろう。	88	11	127	1
148.	すすんだ国々では，使用された労働量とは無関係に，変動の同じ原因が幾つかの他の原因とともに社会の初期段階においてと同じように幅をきかすにちがいない。	90	29	129	15
149.	労働が騰貴するとき，幾つかの商品の価格が下落するというリカードウ氏の命題は真実である。くわえて	91	15	130	7

	もしもそれがもっと自然に述べられていたならば，首尾一貫しているように写ったであろう。				
150.	利潤の下落はその価格がいままで主として資本にたいする必要な報酬から構成されていた商品に価格の下落を引き起こす。	91	21	132	1
151.	おおよそ，労働が騰貴し，かつ利潤が引き下げられるときには，同じ労働量を実際に用いた資本のさまざまな比例に応じて，幾つかの商品は値上がりし，別な諸商品は下落し，さらにごく少数はそのままであろう。	92	17	133	11
152.	ごくわずかな例外を除いて，労働の価格が変動すれば，同じ労働量が使用されているあらゆる商品の価格は変動する。	95	9	137	3
153.	すすんだ国々では，使用された労働とは無関係に，外国商品の輸入，租税のまん延，および地代の支払いが価格のなお一層の変動を引き起こす。	95	21	138	1
154.	ある国の主食の原価がほぼ完全に賃金および利潤に分解されうるという状況は，地代が大半の商品の価格の構成要素を形成するのを妨げない。	96	5	138	9
155.	ほかの土地生産物はその国の主食と比べてはるかに独占の性質をもっている。しかもその価格は賃金および利潤に分解されえない。	98	21	140	7
156.	あらゆる家畜は地代を支払う。またその品質に比例して，ほぼ同等の地代を支払う。	99	8	142	1
157.	家畜の価格はその生産に使用された労働および資本の量によって直接規制されるのではないけれども，間接的には，穀物の生産費への一連の依存を通して規制されているといえる。	100	4	144	1
158.	しかし耕地と牧草地，どちらにおける地代も穀物の価格の上昇なしに騰貴しうるから，この連鎖の環の1つは妥当でないであろう。	100	26	144	13

159.	動物性食物にくわえてほかの多数の商品も，その価格は穀物または労働の騰貴がなくても，地代の上昇によって影響をうけるであろう。	101 13	147 1
160.	したがって労働という用語についてきわめてあいまいな解釈にとどまるなら，地代から免れることはできない。そしてアダム・スミスのいう価格の構成要素が承認されなければならない。	102 23	148 10
161.	もしたった1つの用語を用いるなら，総じて地代と労働の両方を支払う資本を例示するのがより適切であろう。もちろんこの3つの用語がより正しく，かつずっと多くの情報を伝えてくれるものとして望ましい。	103 10	149 1
162.	しかしもしも大部分の商品に関して地代から免れえないならば，その結果，資本額に多大な影響をおよぼし，資本量や資本が使用される期間の変動によって引き起こされる価格のすべての変動に拍車がかかるにちがいない。	103 27	149 10
163.	それゆえあらゆる変動がほかの原因によってもたらされる場合には，同じときに同じ場所で商品の相対価値を決定するのは使用された労働量であるはずない。	104 21	150 12
164.	使用された労働の相対量が異なるときの，およびちがう場所での交換価値の尺度であるというのはなおさらありえない。	105 3	151 5
165.	リカードウ氏がアダム・スミスによって何度もくり返し言及している価値尺度に比べて，自分の価値尺度の優れているのを示すために提示している例証は，同時に，商品に使用された労働がその交換価値のもっとも不完全で，かつ物足らない尺度であることを物語っている。	106 11	152 8
166.	労働は価格の構成要素における主たる成分ではあるけれども，それをただ1つの成分であると考えてしまうと，きわめて大きな事実上の誤認に陥ってしまうにちがいない。	107 12	154 1
167.	それゆえ，使用された労働量は同じときおよび場所	107 32	155 4

	における，ならびにちがうときおよび場所におけるその交換価値の正確な価値尺度ではないと帰結されねばならない。				
168.	**第5節　価値の1尺度と考えられる，その原価において同一である場合の，貨幣について**	108		156	
169.	もしも一定量の貨幣を手に入れるのに，同じ労働がつねについやされているとするならば，こうした貨幣を価値の標準尺度として提案することができると考えられている。	108	1	156	1
170.	しかし依然として同じ場所では，商品の貨幣価格がその交換価値を示しているであろうゆえに，前節で述べられたことから，貨幣価格はそれに使用された労働量を表示しないであろうという結論になろう。	109	10	157	2
171.	貴金属を生産するのに一定量の固定および流動資本を必要とする場合，同じときに同じ種類の資本でもって生産されないところのあらゆる商品は，労働が騰貴し，かつ利潤が下落するとき，貨幣価格において上下するであろう。	109	24	157	9
172.	貴金属が1年間の労働への支払いの前払いだけで獲得される場合には，特殊な同じ状況におかれていないあらゆる商品は，労働が騰貴し，利潤が下落するとき，騰落を呈するであろう。	110	20	158	4
173.	貴金属が1日の食物を上回る前払いを一切必要とせずに，たんなる労働によって獲得される場合には，なんらかの資本が使用されたあらゆる商品は利潤が下落するとき，下落するであろう。	110	31	158	10
174.	したがって商品の相対価格からそれに使用された労働の相対量を推論することはできない。	111	21	159	4
175.	貴金属の耐久性，ならびに貴金属が需要のにわかな減少に適応する困難から，別な変動が生じるであろう。	111	28	159	7
176.	金属はいつも同量の労働および資本で生産されるものの，特殊な国々においてだけ生産されるものと仮定	113	21	162	1

	するなら，金属の現在の分配は金属がさまざまな国々におけるどんなに不適当な真実交換価値の尺度であるのかを映し出す。				
177.	イングランドではほんの1日の労働を支配するにすぎない同じ商品は，いまなおベンガルでは5日または6日の労働を支配するであろう。	114	18	162	14
178.	ベンガルおよびイングランドにおける異なる銀の価値は，おそらく主としてアメリカの鉱山の発見から引き起こっているのではない。というのもいまでは金と銀との関係がヨーロッパにおけるそれとほぼ同じであるからである。	114	28	163	3
179.	ヨーロッパのさまざまな国々では，銀の価値はインドにおけるほど高くないけれども，ヨーロッパの主要国と比べてみるとたいへん多様である。	115	10	163	11
180.	商品の生産費の増加が貴金属の購買を促しえないということは明白である。	115	29	164	4
181.	貴金属はその生産費に応じて同じ国の諸商品の間に分配されえるけれども，さまざまな国々でそのようには分配されえない。	116	4	164	8
182.	貴金属の生産においてまったく想像もつかない規則性がおそらく，商品の価格にそれに使用された労働量の正確な尺度を与えることができる。	117	8	166	13
183.	しかしながら，もしも貴金属がそれぞれの国で，一切資本なしに，日雇い労働だけで獲得されるならば，それらは真実交換価値の尺度に近づくであろう。それは，この場合には，労働での貴金属の価値が労働でのその原価と同じであろうからである。しかしそれでもなお商品の貨幣価格はそれに投じられた労働量を測定しはしないであろう。	118	1	167	9
184.	**第6節　真実交換価値の1尺度と考えられる，商品が支配する労働について**	118		169	
185.	商品が支配するであろう労働はほかのいかなる商品	118	1	169	1

	よりもより精密に交換価値の真実および名目尺度の両性質を兼有している。				
186.	第1に，交換価値の一般的尺度を探求するときには，当然その関心を交換についてもっとも広く話題にのぼっている例の物に向けるべきである。そしてこれは間違いなく労働のことである	119	9	169	6
187.	第2に，商品の価値は労働との交換においてのみ，それが社会の欲望に適合する程度をおおむね表示している。	119	16	169	10
188.	3つ目に，富を増加する資本の効力は労働を働かせる能力，とりもなおさず労働を支配する能力に全面的に依存している。	120	9	170	8
189.	提起された意味で理解するなら，労働は貴金属と同様に同じときおよびおなじ場所における相対価値の正確な尺度である。	120	29	172	1
190.	ほかのすべての商品は甚大で，かつより頻繁で突発的な変動をこうむる。	122	10	173	7
191.	このように労働は同じときおよび同じ場所における価値のほとんど正確な尺度であるけれども，ちがった場所，およびへだたった時期においては商品のうちでこのような尺度に一番近似したものに近づいていく。	123	5	174	3
192.	アダム・スミスは世紀ごとに穀物を労働の最良の尺度して採択している。それはへだたった時期およびちがった場所において労働を生活必需品の最良の尺度と考えるのと同じことである。	120	10	174	6
193.	生活の便宜品は穀物に比べると，一層労働に依存している。くわえてほかのすべての事情が同じであるなら，商品が支配するであろう労働量はそれについやされている量に比例するであろう。	123	32	175	1
194.	商品が支配するであろう労働は交換価値に影響を及ぼす諸事情を含んでいる。それにひきかえそれについやされている労働はもっとも重要な事柄ではあるけれ	124	14	175	8

	ども，ほんの1つの事柄にすぎない。				
195.	同じときおよび同じ場所における交換価値の不良な尺度である商品は，ちがったときおよび場所における真実交換価値の完全な尺度にはまったくなりえない。	124	25	175	13
196.	改良がすすんでいくとき、労働は穀物の最大量を支配するであろうのに，反対におおよそ生活の便宜品の最小量を支配するであろう。	125	3	176	1
197.	概して，それは諸物のなかで真実交換価値にもっとも接近しはするけれども，それでもなお労働は他のすべての事物と同じく需要および供給からの変動をこうむる。したがって労働を標準と考えるわけにはいかない。	125	3	176	1
198.	**第7節　真実交換価値の1尺度と考えられる，穀物および労働の中項について**	126		178	
199.	幾つかの場合には，2つの物の方がたった1つのものに比べて真実交換価値のよりすぐれた尺度をなす。しかもなお実際的適用に十分とりあつかわれえる。	126	1	178	1
200.	一定の品質の穀物のある分量は一定の使用価値を有している。しかしその真実交換価値および名目交換価値はともに年々，ならびに世紀ごとにかなりな変動をこうむるということがわかっている。	126	13	178	7
201.	同じように，労働はちがった時期において，まっさきの生活必需品，すなわち穀物のきわめて異なった分量を支配するということがわかっている。	128	3	179	11
202.	これら2つの物はどちらも1つ1つとった場合には，満足な価値尺度と考えられないけれども，両者を結合すれば，より大きな精度に近づくことができる。	128	24	180	7
203.	穀物が労働に比べて高価であるとき，労働は穀物に比べて廉価であるにちがいない。それに両者の中項を採択するなら，その各々が同時に反対方向に変動することによって訂正される尺度をえるであろう。	128	28	180	10

204.	上記の目的のために，穀物のある特定量をとり決めなければならない。それはざっと平均して，この国に合致しているであろう1ペックの小麦といったような1日分のふつう労働に相応する。それゆえちがった時期における同じ日数の労働および同量の小麦を購買するであろう商品であればどれでも，同じ真実交換価値を有していると考えられる。	129	14	183	1
205.	さまざまな国々を比べるときには，それが何であれ，行き渡っている食物での1日分の労働の平均稼得額が1ペックの小麦に代って用いられなければならない。そしてこのように測定された真実交換価値と同じ価値をもつ諸商品とには貨幣価値においてちがいがあり，それはちがった時期および場所における銀の価値のちがいをあらわしている。	130	4	183	12
206.	資本および熟練の効力を考慮にいれた尺度はまったく存在しえない。それゆえ主な対象が交換価値であるときには，それらを黙過しても大過ないであろう。	130	22	184	6
207.	リカードウ氏は次のように問う。穀物，または労働が，あるいは多数の商品がこぞって変動にさらされているのにもかかわらず，なぜ石炭あるいは鉄よりも尺度として選択されるべきなのかと。しかしある1つの，またはもっと多くの商品が交換価値をあらわすものと考えねばならない。というのもそれらは交換のさい与えられうるすべてのものを含んでいるからである。	131	3	184	13
208.	交換価値の不完全な尺度と，原価という尺度のような根本的に誤っている尺度との間で，二者択一をなさねばならない。	132	11	186	5
209.	リカードウ氏が用いたように，価値とは交換価値を意味していなければならない。そして交換価値の尺度として，どうして石炭または鉄，あるいはなんらかのそういった商品よりも穀物か労働かのいずれか，あるいは両者の中項を選択するのかという理由は明白なのである。	132	14	187	1
210.	**第3章　土地の地代について**	134		189	

211.	**第1節　地代の性質および原因について**	134		189	
212.	地代は農業の通常利潤を含んだ，あらゆる耕作の経費を支払った後に残る土地の全生産物の価値のうちの部分である。	134	1	189	1
213.	研究のいの一番の対象はこの超過分の原因ないし諸原因である。	134	15	189	8
214.	たいていの著述家達は地代を，その性質とそれを左右する法則においてふつうの独占の特徴である生産費を上回る価格の超過分にあまりにも類似したものと考えている。	135	4	190	3
215.	地代は自然的独占とある類縁性をもってはいる。しかしそれはなお本質的には異なっていて，ちがう法則によって左右される。	139	6	195	1
216.	3つの原因が結合して地代を形成する。——1．土壌の肥沃度（手稿では，「自然的または獲得された肥沃度」となっている， Pullen ed., *op. cit.*, Vol. II, p. 285），——2．食物がそれ自身の需要を創出する能力，——3．肥沃地の比較的稀少。	139	23	195	10
217.	これらの原因の1番目のものは地代にとってまさに欠かせない。だからもしそれが存在しないなら，耕作経費を上回る価格の超過分は多分ありえない。	140	6	196	2
218.	現実の地代はたいへんちがっているかもしれないけれども，土地が地代を生みだす能力はその肥沃度（手稿では，「自然的または獲得された肥沃度」となっている， Pullen ed., *op. cit.*, Vol. II, p. 285）に正確に比例している。	140	26	197	1
219.	もしも食物が（手稿では，ここに「適当に分配されるなら，」という文句がそう入されている， Pullen ed., *op. cit.*, Vol. II, p. 285）それ自身の需要を創出する傾向を有していないならば，この能力の成果である剰余はなお（手稿では，ここに「比較的に」という語がそう入されている， Pullen ed., *op. cit.*, Vol. II, p. 285）ほとんど手をつけられないまま残るであろう。	141	14	197	13

220.	生活必需品を生み出す機械は周知のほかのあらゆる機械とはちがっていて，その使用によって特別な結果がもたらされる。	141	22	198	1
221.	ほかの5家族の必需品を生産するであろう土地を有している1家族は，たしかにそれにたいする有効需要者をもっているであろう。しかしかりに同じ家族が50個の帽子または上着をつくる機械をもっていたとするなら，いかなる努力がなされようとも，それらがあまさず求められることを保証しないであろう。	142	10	199	5
222.	エコノミストに限らず，アダム・スミスもしばしば地代の源泉として上述のような土壌，ならびにその生産物の特性に大いに注目を払っている。しかしその特徴が重要でかつ注目すべきものであるのに，近代の著述家たちは地代をふつうの独占の原理によって規制されるものと考えがちである。	144	5	201	14
223.	かりに鉱山の肥沃度が半減したとしても，それらは以前として同じ地代，賃金，および利潤を生み出すであろう。しかしもしこの国における土壌の肥沃度が半減したとするならば，耕地の大半は破壊され，地代，利潤，賃金，および人口は比例して減少するであろう。	144	25	202	4
224.	フランスのあるぶどう園の生産物はたいてい外部の需要によってその価値をいくらか高めるであろう。しかしいかなる外部の需要もけっして1ブッシェルの穀物にそれが扶養するであろう労働量を上回る価値をもたらすことはない。	144	9	204	1
225.	必需品の生産においては，その需要は生産物それ自体に依存している。それゆえ一方で生産物の分量が減少しているのに，需要者が増加するというのはとうていありえない。	147	11	205	6
226.	ふつうの独占においては，生産費を上回る価格の超過分は際限をもっていない。必需品の生産においては，それは土壌の肥沃度（手稿では，「自然的または獲得された肥沃度」となっている，Pullen ed., *op. cit.*, Vol. II, p. 285）によって厳密に制限をうける。	147	17	206	1

227.	それゆえ必需品の価格はふつうの独占の諸原理によっては規制されえない。	149	4	208	3
228.	地代は明らかに，もしそれがなければ耕作者本人以外のだれ1人も生存することができない土地からの剰余物の一部にほかならない。	149	16	211	1
229.	**第2節　土地の地代の，農業者**（本文では，「耕作者」となっている）**の利潤および労働者の賃金からの必然的分離について**	150		213	
230.	社会の初期においては，（手稿では，ここに「もっと正確に言えば，」という語句がそう入されている。Pullen ed., *op. cit.*, Vol. II, p 285）剰余生産物は主に利潤と賃金との間で分配され，ほとんど地代の形ではあらわれない。	150		213	1
231.	利潤および賃金が資本や人口の増加によって減少し，かつ劣等な品質の土地が耕作されるときには，食物の価値は1番肥沃な土地において生産費を上回り，その末に地代が分離されるであろう。	150	16	213	9
232.	前述した2つの原因にくわえて，人口の増加によって引き起こされる肥沃な土地の比較的稀少が，（手稿では，ここに「それが自然的なものであれ，あるいは獲得されたものであれ，」という文言がそう入されている，Pullen ed., *op. cit.*, Vol. II, p. 285）剰余生産物の一部を地代という特殊な形態に分離するのに不可欠である。	151	18	214	5
233.	地主の地代のうちの一部は（手稿では，ここに「もしも農業になんらの改善がなされなければ，」という字句がそう入されている，Pullen ed., *op. cit.*, Vol. II, p. 258）利潤および賃金からの移転から成り立っているにちがいない（手稿では，「にちがいない」という語は省かれている，Pullen ed., *op. cit.*, Vol. II, p. 258）。しかしこの移転は耕作および資源を増加するのに欠かせない要件である。	152	3	216	1
234.	賃金および利潤が下落してしまっても，一切地代を支払わず，しかも一層貧弱な土地をすき返す，より肥	153	10	217	7

	えた土地の耕作者は農業者であるとともに土地所有者でもある。				
235.	利潤および賃金が下落するにつれて，一層貧弱な土地がますますひっきりなしにすき返されていくであろう。そしてそれぞれの段階で地代は騰貴していくであろう。	153	23	218	1
236.	（手稿では，この文頭に，「新しい植民地からはじまった」という語句がある，Pullen ed., *op. cit.*, Vol. II, p. 285）ある自由な国で耕作および人口が累増しているときに，ある品質の土地への1種の固着物としての地代の分離が併進していくのは，重力の原理と同じくらい不変な法則である。	155	1	222	1
237.	君主が土壌の所有であるときには，上記の進歩の規則性は妨げられ，それに地代が早早と創出され，かつ増加する。	155	15	223	5
238.	肥沃な土壌の高い地代は直接には総生産物の大部分をとりこむことによって創出されえる。しかしこの場合には，もっとも肥沃な土地だけが耕作されえるにすぎず，おまけに利潤，賃金，および人口が早早と停止に至るであろう。	156	11	224	4
239.	上記のことは，多数の東方諸国においてある程度実現されてきている。またたくさんの良地が荒れたままになっているけれども，それが原因となって人口が累増していくのをはばんでいる。これらの国々では，地代の肥沃度へのほぼ全面的依存がとりわけ顕著である。	156	24	225	1
240.	このような国々における利潤および賃金の早目の下落には，農業を除いたほかの産業部門における資本および労働の使用による歯止めはきかない。	157	24	226	1
241.	このような国々では，貨幣利子は一般利潤率のもっとも不完全な規準であり，とくに土地に関してはそうである。	158	31	227	3
242.	同じ程度ではないにしろ，似通った諸原因がヨーロッパの大半の国々の初期には幅をきかせていた。しか	159	16	228	1

	も土地の利潤率は製造業や商業における資本の利潤とも，あるいは貨幣利子ともあまり関係していなかった。				
243.	いかなる状況の下にあっても，自然的なものであるのか，あるいは獲得されたものであるのかを問わず，肥沃な土地の稀少が引き起こるときには，地代はつねに一般的剰余生産物から分離する。	160	14	229	1
244.	**第3節　社会のふつうの進歩において地代を引き上げるのに寄与する諸原因について**	160		230	
245.	生産物と比べて生産費を引き下げ，その結果地代を引き上げるのに主として貢献するものとして，4つの原因を列記できる。	160		230	1
246.	はじめの2つ，すなわち利潤と賃金とはときに反対方向に影響をうけて，お互いに相殺し合うけれども，これはほんの一時的結果にすぎない。概して，利潤および実質賃金はともに下落し，しかもリカードウ氏が叙述しているように，穀物および労働の絶え間ない金銭上の騰貴がこのことを引き起こしているであろう。	161	29	234	5
247.	しかし利潤および実質賃金は下落するであろう。また貨幣価値がどのように変動しようとも，地代はきちんと分離される。	162	18	235	10
248.	耕作経費を引き下げ，地代を引き上げる3つ目の原因は農業上の改良である。	163	13	237	1
249.	もしもその改良が生産量を増加させずに，生産費を低減させるようなものであるならば，価格はそのままで，かつ費用の低減はあまさず間をおかずに地代になっていくであろう。	163	19	238	1
250.	もしその改良が生産物を増加するようなものであるなら，価格が下落する反面，人口がまったくすぐさま増加し，しかもたたく間に一層貧弱な土地が価格の上昇のないまますき返されて，地代を引き上げるであろう。	164	13	239	1
251.	わが国に起こった農業上のきわめて大きな改良はそ	165	3	240	6

	の成果のほぼ全部を地代の増加と租税の支払いとに帰してきた。				
252.	地域的な農業上の改良は借地解約の更新のさいに，たちまち地主の手に入り，特定地方においては，利潤およびふつう利潤率の減少をまったくともなわない地代のきわめて大きな上昇を引き起こす。	165	20	241	1
253.	必需品の生産における容易さはほかのあらゆる商品とはちがって，価格の永続的な下落をけっしてともなわない，またそれゆえつねに地代を増大する。	165	32	241	7
254.	地代を引き上げるのに役立つ4つ目の原因は，生産物の価格と生産費との差額を増大するような農業生産物の価格の上昇である。	166	10	242	1
255.	使用された労働の増加によってもたらされた穀物の騰貴は，一定の時期を経過すると，きわめてせまい範囲内にかぎられる。	166	15	242	3
256.	需要によって引き起こされ，つまるところ貨幣価値の下落に帰着していく穀物の貨幣価格の上昇は，賃金および利潤を必ずしも下落させるわけではないけれども，耕作を奨励し，地代を増加させる。	167	1	242	9
257.	アメリカ合衆国（本文では，「北アメリカ」となっている）における貨幣価格の状況は，上記の局面を典型的に例証するのに役立つ。	167	20	244	1
258.	穀物にたいする大きな需要や高い貨幣価格によってもたらされた類似した結果は，1793年から1813年の終わりにかけてわが国自身に引き起こり，地代は利潤の下落のないまま騰貴した。	168	5	246	1
259.	似通った結果は製造品にたいする大きくかつ増大していく需要，あるいはまた生産物にたいする販路を十分にともなった機械の巨大な改良によって生じるであろう。	170	12	251	1
260.	農業への刺激が商業ならびに製造業の盛況に由来している場合には，何よりもまず労働がしばしば騰貴す	171	9	252	1

	るけれども，必ずというわけではない。				
261.	穀価が騰貴するとき，同時に資本の原料が値上がりしたり，あるいは終末においてさえ同一の比率で値上がりするというようなことは至極まれにしかありえない。	171	24	252	8
262.	貨幣価値における下落はほぼ間違いなく永続的に貧しい土地を耕作し，かつ地代を引き上げる能力を増大する。	172	17	253	2
263.	相対的に生産費を低減するという手立てで地代を引き上げるのに役立つ4つの原因が，1つの騰貴をもたらすために一斉に作用しなければならないという必要はない。	173	4	257	1
264.	わが国（手稿では，「戦時期のわが国」となっている，Pullen ed., *op. cit.*, Vol. II, p. 285）において，生産手段の1つ――資本は高価であったし，また利潤も高水準であったけれども，耕作は拡張され，そのうえ地代も引き上げられた。	173	21	257	9
265.	賃金の高騰があっても，農業上の改良が地代を引き上げるであろう。	174	4	258	6
266.	地代が既耕地において騰貴したり，あるいはまだ騰貴する余地をもっている間は，新しい土地が開墾されることはない。	174	8	258	8
267.	地代の騰貴へ同じ貢献をなさないなら，新しい資本が低利潤で古い土地に使用されるわけはない。	175	6	259	11
268.	地代の騰貴は耕作の拡張，あるいは生産物の増加に比例しないであろう。	176	3	260	11
269.	わが国の地代は名目上であれ，実質上であれ，いずれの場合にも大いに増大してはいるけれども，全生産物にたいして占める割合では以前よりも小さい。	177	1	261	9
270.	地代の絶え間ない騰貴は疑いなく，資本の蓄積，人口の増加，農業上の改良，および粗生産物の高価格（手稿では，「高い価値」となっている， Pullen ed., *op.*	178	1	262	16

	cit., Vol. II, p. 285）と関係している。				
271.	**第4節　地代を引き下げる傾向のある原因について**	178		264	
272.	資本の減少，人口の減少，劣悪な耕作制度，および粗生産物の低価格が地代を引き下げる。	178	1	264	1
273.	はじめの3つは低地代のあまりにも明白な原因であるので，4つ目の原因だけに考察を加えれば十分である。	178	11	264	5
274.	最後の原因の結末を耕作を放棄された土地や，終戦時のわが国おける地代の下落で例証することができる。	179	16	265	7
275.	1国の生産物が減少し，あわせて地代が下落しているとき，すべての生産手段がより高価でなければならない必要はない。	180	24	266	8
276.	土地が未耕作なまま放置されているとき，地代はその額では減少するが，資本および生産物にたいしてはより大きな割合を占めるであろう。	181	13	267	10
277.	地代が消費者にとって有害であるという所感を抱いているとき，もしも穀価が地代を少しも生まないほどに低く下がったままであるとしたならば，最優良地を除くすべての土地は耕作されずに放棄されるであろう。	182	10	268	15
278.	**第5節　土地からえられる生産物の現実の収量が，現存の地代および現在の価格に依存していることについて**	183		271	
279.	どの進歩的な国においても，穀物は現に用いられている最劣等質の土地の生産費に，その土地が自然的状態で生みだすであろう地代を加算したものに等しいであろう。	183	1	271	1
280.	したがって増加された総量に関していえば，穀物はあらゆるほかの非独占的商品と同じように，その自然価格や必要価格でさばかれる。	183	24	272	9
281.	改良をすべて受容するとはいえ，土壌はまちまちす	183	18	273	8

	ぎるほどの本来的品質と能力を有したさまざまな等級の多数の機械からなっている。				
282.	製造業においては，もっとも改良された機械が求められる量だけ供給されうるので，劣等な機械はすたれて，商品価格は改良された機械によって下落する。	184	32	274	1
283.	農業においては，豊沃な土地が人口をみたすのにけっして十分あるわけではない。そして劣等地が使用される場合，その価格を生産費と比べてみると，それはすべてのより豊沃な土地がそれぞれの優良さに比例して地代を生み出すほどのものであらねばならない。	185	12	274	8
284.	穀物の生産用の機械に関してここで引かれる例証は，大半の国々の現状においては，現実の価格が現実の生産物にとって不可欠であることを示すとともに，あわせて製造品価格の下落や穀価の下落に随伴するさまざまな結果を示している。	185	30	274	16
285.	とはいえ厳密にいうなら，こうした土壌の等級が地代の形成や騰貴に不可欠であると推論すべきではない。欠かせないのは，肥沃度および需要と結合した制限された領域である。	186	17	275	9
286.	かりに制限された領域のすべての土地がひとしく豊沃であるなら，しばらくすると，地代は土壌の肥沃度に比例して高くなるであろう。	186	29	275	17
287.	かりに同じ土地に投じる資本量を増加することができないとしても，その結果はまったく同じであるであろう。すなわち資本はほかの使用において増加して，利潤は下落するであろう。	187	14	276	8
288.	上記の場合には，地代は間違いなく土壌の等級によって、あるいはまた同じ土壌に使用された同額の資本のまちまちの収益によって規制をうけはしない。	187	25	276	14
289.	以上の地代論から引き出されてきたもう1つの誤った推論があるが，それは土地が耕作されないまま放棄されるとき，利潤はそのとき使用された土壌の肥沃度に比例して高くなるであろうとする推論である。	188	3	277	3

290.	すすんだ国では，未耕作地は家畜を飼育したり，あるいは木材を生長させたりするその能力に見合った地代を生み出す。それゆえこうした状況では，耕作されている最後の土地の全生産物を利潤と賃金とにわけることはできない。	188	7	278	3
291.	穀物の貨幣価格が農業者の資本の原料に比べてより値上がりするなら，利潤はなおさら下落していくであろう。そのうえしばしば自然の肥沃度のちがいを相殺しあまりが出てしまう。	189	17	279	9
292.	地代が支払わられないならば，同じ土地に使用された最後の土地の収益がいつも生じるに違いないが，けっして利潤を先導したり，あるいは規制したりすることをなしえない。	189	28	283	1
293.	外国産穀物の輸入によって土地が耕作されないまま放置されているときには，資本はおそらく過剰であるであろう。くわえてその場合には，耕作されている最後の土地の状態がどんなふうであろうとも，利潤は低いにちがいない。	190	12	284	4
294.	その自然的状態において地代が土地にたいして支払わられるとしても，土壌のまちまちな等級をもっている進歩的な国々において，穀物がその自然価格ないしは必要価格で売られるという学説はゆるぎはしないであろう。	190	28	285	1
295	**第6節　大きな比較上の富と高い比較価格との関係**（本文では，つづりが Connextion となっている）**について**	192		287	
296.	穀物と比べて多くの種類の粗生産物を高騰させる原因を説明するさい，アダム・スミスはちがうとき，および異なる国々における穀物の価値の差異の原因を考察するのを省いてしまっている。	192	1	287	1
297.	これらちがいについての2つの主たる原因は，貴金属の価値のちがいと穀物の生産費におけるちがいとである。	193	3	288	2

298.	前者の原因はさまざまな国における，わけてもお互いにとてもへだたって位置している国々における穀価の大きなちがいにもとづいている。	193	10	289	1
299.	もし貨幣価値がすべての国で均一であるなら，その場合，それぞれの国の実情がどうであろうと，価格のちがいはもっぱらさまざまな生産費から生じるであろう。	194	7	289	14
300.	状況が似通っていれば，他国に比べてより豊沃な国々は高価格でその穀物を保持するか，あるいは隣国にその扶養をゆだねるか，そのいずれかである。	194	27	290	10
301.	それぞれ状況によっていろいろと修正をうけはするけれども，高価格か，それとも必需品の輸入かは，富の大きな増進につきまとう自然的二者択一である。	196	10	291	16
302.	穀物は生産費の増加によって，社会の進歩の途上でおのずと騰貴する傾向を有している，また製造品は反対の理由によって絶えず下落する傾向をもっている。	197	12	292	17
303.	高い穀価の２つの原因のどちらに光を合てようとも，アダム・スミスの論述とは反対に，この高価格は総じて富と関連している。	197	19	293	4
304.	**第７節　地主をしてその土地を賃貸するさいに誤らせ，彼自身ならびに国の両者**（本文では，原語は both of himself となっていたが，ここでは both himself とある）**に害を及ぼす諸原因について**	199		295	
305.	自分がどのような境遇にあろうと，地主は借地契約の更新にあたって，当然その地代を引き上げようとするであろう。しかしこれを実行するときには，自分自身および国に損害を及ぼす誤りにおちいるであろう。	199	1	295	1
306.	まったく細心の注意を払わないまま最上の入札者にその土地を賃貸したり，あるいはまた価格の一時的騰貴を永続的なもの誤認したりしてしまって，地主は自分の農地の改良をしそこなうであろう。	200	7	296	1

307.	それが永続的でありそうな場合ですら，価格の上昇のさいして，地代は間違いなくいつもやや遅れをとる。	201	14	296	4
308.	もしも地主がその地代を残らず借地人にゆずってしまうなら，穀物がずっと豊富に，かつ安価であるとはまったく考えられない。	201	23	297	8
309.	しかし勤労や進取といった立派な精神が借地人にくまなく行き渡るときには、借地人たちが蓄積および改良の資力をもっていることが肝要である。	202	14	298	4
310.	通貨の不規則性は地主にとっては誤りをもたらすもう1つの源である。それが長らく続くと，地主はそれに応じて地代を引き上げねばならず，また貨幣価値が回復すると，重ねて地代を引き下げねばならない。	203	7	299	7
311.	上記のことに留意すれば，地主はまさしく地代の永続的な増加を期待することができる。またもしも耕作を拡張している国で，地代が穀価に比例するほど騰貴しないならば，それはまったくもって課税のせいである。	203	18	299	13
312.	エコノミストが論述しているように，あらゆる租税が地主の肩にふりかかるというのは真実ではないけれども，地主が租税を免れる能力をほとんどもっていないというのはいまなお真実である。	204	1	300	5
313.	**第8節　自国の人口を扶養している国における，地主の利害と国家のそれとの厳密でかつ必然的な関係について**	204		301	
314.	アダム・スミスは地主の利害を国家の利害と緊密に関連するものと考えている。またこのことは、本章で言及されているように，地代論によって確認されるようにおもわれる。	204	1	301	1
315.	しかしリカードウ氏はこれらの理解をお互いに真っ向からあい反し合うものと考えている。氏は地代をもっぱら高価格ならびに生産の困難から生じるものと理解する独特でかつ狭あいな見方から以上のような見解に達している。	205	10	301	8

316.	もしこうした見方が正しいなら，上に述べられている見解は十分な根拠をもっているであろう。しかし事実上，地主が主として生産の便宜に依存していることを知得するなら，この見解はくずれ去る。	205	20	302	3
317.	とてつもなく並外れた肥沃度がある国に突如として出現して，土地の地代がしばらく下落するであろうことはありえる。	206	1	303	1
318.	とはいってもとっぴな仮定を強調するのはまったく無益である。現下の状況およびありうる状態において，地主が利害と社会の利害とが相容れないのかどうか，これが知りたいのである。	206	13	303	8
319.	これまでに見聞した農業上の改良では，人口が生活資料の増加分のぎりぎりまで増加するという能力に対応できない。	206	32	304	1
320.	現実に，農業上の改良は生産用具を低廉にして，総じて耕作地を放棄せずに，ずっと多くを耕作する誘因となる。	207	1	304	4
321.	耕作を一層貧弱な土地にまで押しすすめると，地代は騰貴する。しかし依然として，貧弱な土地ではなく，地代を生み出す豊沃な土地があるということ自体が地代と肥沃度との関連を示す。	207	24	305	4
322.	それが資本や人口の増加の結末であり，また利潤や賃金の下落の結果であるということを除けば，利用される最優良地の生産の困難は地代とはほとんど無関係である。	208	6	305	12
323.	生産の困難から生じ，価格状況によってもたらされる地代の増加は，想像されてきているよりははるかにずっと限られていて，農業上の改良にもとづく増加に比べるとごく微小である。	208	12	305	15
324.	こうした様相はイングランド，スコットランド，アイルランド，ポーランド，インド，および南アメリカの状態によって例証されえる。	208	24	306	3

325.	これらの国すべてにおいて，地代の増加の行方はもっぱら改良された農業制度にかかっている。	208	24	306	3
326.	アメリカ合衆国は利潤および賃金からのたんなる移転によって，地代の相当な増加をなしえるであろう無二の国であるようにおもわれる。	210	20	308	5
327.	古めかしい国家では，労力を要する幼稚な耕作制度のために，資本（stock）の利潤および労働の賃金は低いままで，多くの優良地が耕作されずじまいである。かつこうしたことはまったく珍しい事例ではない。	210	30	308	10
328.	しかし輸入に頼っていなくて，国を富ますのに寄与するものは何であれ地代を増大し，また国を貧困に陥らせる傾向のあるものはいずれも地代を減少するという場合には，地主の利害と国家の利害とは分かち難く結び合わさっていることが認められなければならない。	211	18	309	2
329.	リカードウ氏は地代に関してたった1つの単純な見解をとっているが，それは問題のわずかな部分を包含しているにすぎない。	211	29	309	9
330.	その特有な用語のため，リカードウ氏は実質上よりも外具上，自己の帰結を真実からさらに一歩遠ざけている。	212	11	310	1
331.	彼は地代，賃金，および利潤を見積るさい，それぞれにあてがわれる生産物の実際の分量ではなくて，それら各々が全生産物にたいして占める割合によっている。	212	18	310	5
332.	地代ならびに賃金を見積る上記のような手法はまったく常軌を逸していて，次から次へと混乱と誤りとに誘導するであろう。	213	24	311	9
333.	リカードウ氏は価値と原価とを混同したり，穀物と製造品とを同じ観点から考察したりしてしまって，上述のような異常な用法へと誘惑されたのである。	215	1	316	1
334.	地主の当然と取り分となる穀物の交換価値は，その量に見合って増大するであろう。また地代ならびに賃	215	19	316	13

	金は実際上，例外なくそれらの真実交換価値によって評価を下さられねばならない。		
335.	本書において，地主の利害に言及するさいには，地主の富の真実支配，つまりその地代の真実交換価値が云云されている。	216 7	317 4
336.	**第9節　穀物を輸入する国における地主の利害と国家の利害との関係について**	217	321 1
337.	地主と国家とのまったく寸分たがわぬ利害の結合はこと輸入に関してはいぶかわしい。しかもこの場合，地主の利害は似通った状況におかれているその他の階級の利害以上に，国家の利害と鋭く対峙しているわけではない。	271 1	321
338.	アダム・スミスの所見によれば，製造業者は外国の競争によって損失をこうむるけれども，地主は損害をうけない。	217 18	322 1
339.	アダム・スミスの論述は度を超している。けれども穀物や家畜の生産者がえり好みの著しい製造品の生産者と同じほど，外国の競争によって痛手をこうむらないというのはたしかに真実である。	218 4	322 5
340.	輸入の問題に関しては，資本を実際に土地に使用するという方法では，国家と耕作者との利害はお互いに調和されないということを見落とせない。	218 16	323 7
341.	国の耕作は主に借地人によってなされる。近年の農業上の永続的改良の大半は同階級の人々によっておこなわれてきている。	218 24	323 12
342.	もしも以上のことが真実に反していないならば，国がこのような資本の使用から引き出す利得は，個人がそれらを使用して入手する利益に比べるとはるかに大きかったにちがいない。	219 29	324 14
343.	借地人が長期間にわたって商人や製造業者にたいして確たる地歩を保持するためには，借地契約の終了時に回収することのできない自己資本の一部を補てんす	220	325 3

	るために，年々ずっと高い利潤を実現しなければならない。しかもその利潤は借地人の手元には残らず，国家にたいする利益となる。				
344.	農業に使用された資本は国家にたいして14または15パーセントの利潤をもたらし，また商業では12パーセントの利潤をもたらすとしたとしても，どちらの場合でも，個人はただ12パーセントの利潤をうけとるにすぎないであろう。	222	8	327	9
345.	土地に使用された資本から引き出される地代と利潤との総和は，国の所有となる富の真実尺度である。けれどもこうして創出された地代が借地人にたいする動機として機能したためしはない。	221	23	326	2
346.	戦時中に外国穀物の輸入にくわえられた諸困難のゆえに，わが国の資本はたしかに高い個々の利潤をもたらすことはなかったけれども，より高い国家の利益をもたらす経路に注入されてはいたであろう。	222	26	328	4
347.	国産穀物への需要が旺盛で，耕作の利潤を創出された地代と合算すると，それが商業および製造業の利潤を上回るような場合には，上述のことがつねに妥当するにちがいない。	223	8	328	8
348.	輸入の困難な時期には，富の増進とともに人口の急速な増加があって，土地に投じられた大量の資本が生産的に使用されたという想定を裏付けているようにおもわれる。	223	22	330	1
349.	ここで設定された状況は制約をうけている。すなわちつまるところ一時的利益しかもっていない資本家によっておこなわれている永続的改良次第である。	224	13	330	8
350.	どのような状況であれ，ほかのいずれの階級の利益も地主の利益と同じほどには国家の利益と密接に関連していないと言い切っても一向にさしさわりないであろう。	225	3	333	1
351.	**第10節　土地の剰余生産物に関する通観**	226		334	

352.	地代を形成する土地の剰余生産物から引き出される社会のきわめて大きな利益がいまだに十分に理解されていなく，かつまた認められていないのは異常である。	226	1	334	1
353.	それは神の恵み深い賜物と呼ばれてきている。しかしリカードウ氏は非常にちがった視角でそれを考察している，――章句の引用。	226	6	334	3
354.	賜物に論及するときには，自然の法則と構造とともに，あわせていま暮らしている世界のそれとも連関させて，云云しなければならない。そのさい限られた余地で食物を生産する無窮の能力ほど人類にとって破壊的な賜物はほかにはない。	227	20	335	11
355.	しかしかりにも土地と食物との両方が事物の性質上限られるのを免れえないなら，人類が受けとる土地の価値は土地を耕作するのに要した人数にたいする土地によって扶養される人頭に，つまり別言するなら，剰余生産物に左右されるにちがいない。	228	25	336	14
356.	リカードウ氏が述べているように，もし製造品が機械の等級分だけ地代を生み出すなら，人類は労働により精を出すであろう。反対に地代の源である土地の剰余生産物は人類が労働を軽減されている表象である。	229	6	339	1
357.	リカードウ氏はおおよそ，恒久的でかつ究極的な結末に注目を払っていて，土地の地代に言及するさいにはいつも反対の経緯を辿ってきている。	230	5	341	1
358.	リカードウ氏は一時的な結果に目を奪われたからこそ，米，またはジャガイモの耕作の方が穀物の場合に比べて，より高い地代を生み出すであろうとするアダム・スミスの所論に異を唱ええたのである。	230	15	341	7
359.	穀物から米への移行が漸進的であるにちがいないから，地代の一時的な下落さえ目にしないであろうと感知しても何ら不思議ではない。	231	7	342	8
360.	アイルランドにおいては，ジャガイモの耕作が主因となって，過去1世紀の間にわたって人口および地代を大幅に増大させてきた。	232	1	344	1

361.	面積ならびに使用された資本量に関して，類似した状況にある国々を比較対照してみるなら，地代はおおよそ自然的または獲得された肥沃度にほぼ比例しているであろう。	232	29	344	15
362.	もしこの島がいまの倍だけ豊沃であったなら，現在では，おそらく富は倍加し，人口も増加して，おまけに地代もいまの倍額を上回っていたであろう。また半分だけ豊沃であったにすぎないとするなら，その反対のことが生じていたであろう。	233	12	345	9
363.	しかしたとえ高い地代と大きな肥沃度とが総じて並行してすすんでいくとしても，イングランドと南アメリカというようなとてもちがった状況にある国々においては，それらはお互いに近似した割合を占めるはずはない。	233	25	346	1
364.	自然的であれ，獲得されたものであれ，土地の肥沃度というものは，資本にとっては永続的に高い収益のたった1つの源泉である。というのも競争が商業や製造業の高利潤を間違いなく消滅させるにちがいないからである。	234	1	346	6
365.	土地に投じられた資本によってもたらされたわが国の課税可能な所得は，商業および製造業から引き出されるそれと比べて，3倍以上である。	234	31	348	1
366.	肥沃な領土の隆盛は，製造業国家の繁栄と同様に，低賃金に負ってはいない。主として製造業に頼っている国にあっては，貧民の間の慎慮的抑制が国を滅亡に導くとはいえ，農業国家においては，その習慣は最大の恩みとなるであろう。	235	21	349	1
367.	私有財産制度を前提とするなら，社会全体は土地からの剰余生産物が必需品を生産するのに用いられることによって，1つの保証を受け得るけれども，それは最小の利点ではない。	273	3	351	1
368.	相対的にみて，利潤と賃金とは享楽手段をほとんど生み出さないほどまでに低落するであろう。他方地代の方は増加してやまず，全大衆の隅から隅までというほどに，技芸，科学，および余暇用の財源（funds）を	237	31	352	1

	もたらすであろう。				
369.	地代は土壌に属するものであり，個々の所有者に属するものではない。地代は過去の骨折りの報酬であると同時に，現在の報酬でもある。それに地代は増大するにつれて，ますます多数の人々の間で分配されるであろう。	237	31	352	1
370.	地代の性質や地代が社会に及ぼす影響について，何らかの誤解に陥り，苦悩している人たちだけが，結局のところ地代におさまるところの剰余生産物の大切さをあまりに軽んじえるにすぎない。	239	1	354	1

小林訳 下巻（第4章—第7章）

371.	**第4章　労働の賃金について**	240		9	
372.	**第1節　労働の賃金の供給および需要への依存について**	240		9	
373.	賃金は労働者の個人的奉仕 (services) にたいし彼に支払われる報酬であり，また名目（賃金）と真実（賃金）とに分類することができる。	240	1	9	1
374.	名目賃金とは労働者が稼いだ貨幣のことである。真実賃金とはその貨幣が支配するであろう必需品ならびに便宜品のことである。	240	5	9	4
375.	労働の需要および供給を労働にたいして支払われるものの需要および供給と比べられることで，賃金が確定される。	240	17	9	9
376.	需要および供給の原理は，一時的にだけではなく恒久的にも労働の賃金を確定する。	241	4	10	1
377.	生活必需品の価格は労働の生産費に影響を与えることを通して，労働の供給にはね返っていく限りにおいてのみ賃金に反映されるにすぎない。	241	11	10	4
378.	その生産費が労働の供給に影響を及ぼさない場合には，いつも賃金は影響をうけない。	241	30	11	1

379.	労働の貨幣価格が労働需要，および必需品価格によって規制をうけるとするアダム・スミスの主張は，実際上本当に正しい。とはいえつねに，必需品の価格がどんなふうに労働の価格にはね返っていくのかを視野におさめておくのは大切である。	243	3	12	2
380.	アダム・スミスが例示しているような，色々な仕事においてまちまちな労働の価格がある場合には，その帰すうはいつも労働の供給に影響を与える原因によって左右される。	243	14	12	7
381.	大雑把にいって，アダム・スミスは以上の類の場合には，需要および供給の原理に言及してはいるものの，ときとしてそれを忘れ去ってしまっている。	245	18	14	11
382.	**第2節　主として労働階級の習慣に影響を及ぼす原因について**	247		17	
383.	労働の自然価格についてのリカードウ氏の定義は異常でかつ不自然な事態をさしている。	247	1	17	1
384.	労働の自然ないしは必要価格とはその社会の現状において，要求された供給にかかせないまさにその価格である。	247	17	18	1
385.	労働階級の境遇は幾らかはその国の資源が増加している速度に，またある程度はその人民の習慣に左右される。	248	3	18	5
386.	これらの原因は両方とも変化をうけやすいし，そのうえしばしば相伴って変化する。	248	9	18	7
387.	しかしながらそれでもなお習慣は資源の増加が同じであっても異なる。また低劣な生活様式（mode of living）は貧困の結果であると同時に，原因の1つでもある。	249	8	19	8
388.	さまざまな国々の貧民の間に広く行きわたっている多様な暮らし振り（mode of subsistence）の主因をつきとめることは，難事ではあっても，意義深いことである。	249	29	20	1

389.	高賃金はつぎの2つの成行きをもたらしうる——1つは人口の急増であり，いま1つは生活様式の決定的な改善である。	250	9	20	9
390.	貧民の品性を落とす向きのあるものは何であれ，上記のうちの前者の結果の呼び水であり，他方それらを向上するのに寄与するものはいずれも後者の結末を招来する。	250	18	20	14
391.	堕落にとってもっとも手痛い原因は専制政治，圧制，および無知であり，また向上にもっとも効果的な原因は市民的および政治的自由と，教育とである。	251	6	21	9
392.	市民的自由は慎慮的習慣を作り出す諸原因のうちでもっとも根本的なものである。くわえて市民的自由の維持には，一般的に政治的自由が必須である。	251	11	21	13
393.	専制政治の下で教育を普及することはできるし，また自由な憲法の下で不十分な教育を目にすることがある。とはいっても教育は秕政の下ではほとんど無効ではあるものの，善政の下ではいかんなく効力を発揮する。	251	30	22	7
394.	アイルランドは，増大する生産物が人民の境遇を改善しないまま，人口の急増を引き起こした事例の1つである。	252	19	23	2
395.	前世紀の前半におけるイングランドは，高賃金が人口の急増をもたらさずに，生活様式の改善を実現した例の1つである。	253	7	23	13
396.	パンが下等な品質から最良質の精白小麦へと変貌をとげたのは，多分偶発的な事情に端を発する小麦，からす麦，および大麦の相対価値の変動に誘発されてのことである。	254	17	24	15
397.	精白小麦パンがいくつかの地方で常食になったあかつきには，それは千種の愉楽を犠牲にしてまでも，ほかの地方にも広がるであろう。	256	28	27	5
398.	**第3節　労働にたいする需要および人口の増加に主として影響を与える原因について**	257		28	

399.	生産物の価値が労働の価格と比較して下落するときには，必ずそれに見合った人口の増加が生じるとは限らないであろう。	257	1	28	1
400.	見かけの賃金と人口の増進との間のこうした食い違いは，救貧法が威力を振るっているような国々においてはさらに深化するであろう。	258	30	32	1
401.	人口の増加にとっては，労働に精を出す家族を扶養するのに何らかの種類の食物ないしは別種の食物をかなり大量に実用することが不可欠であり，またこのことをおおよそ確認することができる。	258	18	33	1
402.	アメリカ，アイルランド，イングランド，およびスコットランドにおいて近年みられる人口の増加は，上述の起因によってきているであろう。	260	11	33	10
403.	人口の急増にとってことさら欠くべからざるものは，労働にたいする大きな需要であり，またその需要は資本だけの増加ではなく，資本と収入の合算の増加に比例している。	261	8	34	8
404.	労働需要に影響をもつのは，固定資本ではなく，流動資本であると考えられてきている。しかしこの区別は個々の事例においては正当であっても，総生産物の価値を云云するさいには不要である。	261	17	35	1
405.	あらまし，固定資本の使用は流動資本を潤沢にするのにはなはだ好都合である。わが国のほぼ全製造業者がこれを証明している。	262	20	37	9
406.	不毛な土壌の耕作はもっぱら農業における固定資本の利用のいかんにかかっている。	263	11	38	9
407.	けれども固定資本が商品需要と比べて，あまりにも急速に増加して，総生産物の価値をも下落させてしまうときには，労働階級の間で，雇用の不足とともに当面の困苦が痛感されるであろう。	264	1	40	1
408.	1国の生産物の交換価値は幾分かは価格に，また幾らかは分量に依存している。	265	18	43	1

409.	1国が現存の物理的資源において，富の増加と労働需要とを極限にまで至らしめるのは，もっとも都合のよい加減で上記の2つを結合することによる。	266	5	46	1
410.	**第4節　貨幣価値の下落が労働需要，および労働者の境遇にもたらす結果について**	267		47	
411.	貨幣価値の下落が労働者の境遇にもたらすよからぬ結果は想像されてきているよりもあいまいである。	267	1	47	1
412.	15世紀末葉から16世紀の終わりにかけて，労働の真実賃金の下落が貨幣価値の下落と同時に併発しているが，それは信頼すべき資料によって立証されている。	267	20	47	11
413.	しかし問題であるのは，高賃金か，低賃金か，どちらの方が異常の最たるものであるかである。	269	24	50	3
414.	エドワード3世の治世の間，労働の真実賃金は終始エリザベスの治世におけると同じほど低かったようにおもわれる。	270	8	50	8
415.	その中間期においては，それ（真実労賃）は穀物ならびに労働の価格変動と並行して大いに変動した。けれども1444年からその世紀の末にかけては，一貫してきわめて高いままであった。	272	22	53	6
416.	14世紀中頃から15世紀末にわたって，穀類の名目価格がごくわずか騰貴したが，それはどうみても鋳貨の中の銀の分量の減少を償わず，そのゆえに穀物の地金価格は随分と下落した。	273	26	54	10
417.	しかし労働の地金価格は穀物の地金価格が下落した時期の間かなり騰貴した。またもしもアダム・スミスが自分の尺度として，穀物に代えて，労働もしくは穀物と労働との中項のどちらかを採択していたならば，銀の価値に関する彼の結論はとてもちがっていたであろう。	274	22	55	9
418.	とはいえ労働の賃金が15世紀の終わりの60年の間ずっと異様であったことを明らかにするには，さらにそれを貨幣の減価が止んだ後の時期と比較しなければならない。	275	14	56	6

419.	貨幣の減価がおさまった後の17世紀の最後の60年の間は，労働者の稼ぎは終始エリザベスおよびエドワード3世の治世におけるよりも一層低かった。	276	11	57	6
420.	1720年から1750年に至るまで穀価は下落し，労働の賃金は騰貴したけれども，それは15世紀に稼ぎ出されたものの半分そこそこのみを支配することができたにすぎなかった。	279	23	60	16
421.	上の時期以降，穀物は高騰し始め，かつ労働はぴったりそれに比例して騰貴する兆しをみせなかったけれども，1770年から1810年もしくは1811年にかけての40年間では，穀物の支配力でみた労働の賃金はほとんど不変のままであったようにおもわれる。	279	20	61	4
422.	**第5節　これまでの5世紀間の穀物および労働の価格についての前述の概観から引き出される帰結について**	281		63	
423.	以上の概観から，16世紀における労働の大きな下落はまぎれもなくアメリカの鉱山の発見によるというよりも，これまでに記録した異例の高騰を起因にしてもたらされたようにみえるし，また15世紀の高賃金はたんに穀物の供給を労働に比べて，相対的に増加させた若干の一時的原因からもたらされたにすぎないようにおもわれる。	281	1	63	1
424.	たとえアメリカの鉱山が発見されていなかったとしても，またそれらの原因が何であったとしても，このような高賃金が翌世紀の間下落の一途を辿ったことは疑いを容れえない。	282	19	65	1
425.	ただたんに貨幣価格の下落によって引き起こった穀価の騰貴のせいで，労働階級が2，3年以上もの年月にわたって害をうけないであろうとみなしても理には反しない。	283	7	65	6
426.	この概観から別な推論が導き出せる。それはイングランドにおける労働の穀物賃金が，過去500年の間に何度も何度も小麦1ペック余りを下回っていたというものである。	284	1	66	5
427.	3つ目に，天候がときたまの2年ないしは3年とい	284	21	66	16

	う期間ばかりでなく，15年または20年もの間も間断なく，穀価，ならびに労働の真実賃金に多大な影響を及ぼしていると推察される。				
428.	労働の価格が騰貴するのに不都合な状況におかれていて，穀価の上昇が起こった時は，おおよそ最低の賃金(手稿では，「最低の真実賃金」となっている，Pullen ed., *op. cit.*, Vol.II, p.285) が出現した時期と重なり合う。たとえばヘンリー8世やエリザベスの治世においては，人口の急増のために，賃金は穀価とともには騰貴しなかった。	286	4	68	6
429.	もしもアメリカの鉱山が発見されたとき，人民の稼ぎ高が半ブッシェルではなく，その半分の1ペックにも満たない小麦にすぎなかったとしたならば，穀物の貨幣価格が増加していたにもかかわらず，その資源の増加は16世紀を通して労働の穀物価格を終始上昇させたであろう。	287	5	69	4
430.	かりに人為的手段が1793年から1814年にかけて講じられて，労働の価格が低くおさえられていなかったとするなら，労働の価格は穀価にまったく比例して騰貴したであろう。	287	25	69	14
431.	穀物賃金を概算するさい，たとえ穀物の下落と労働の騰貴とが労働需要や人口増加にちがった影響を与えるとしても，それらを振り分けることはいまだにできないままである。	288	29	71	1
432.	小麦がわが国で常用される穀類であると解されてきたけれども，それが実情を反映していない場所ではどこであれ，また同様にそんなときはいつでも，小麦での賃金は人口に与えられる促進剤の正確な指標ではない。	290	7	72	3
433.	労働家族によって年間を通して現実に稼ぎ出されえる常食の量目こそが，とりもなおさず人口にたいする促進剤の尺度であり，かつ労働者の境遇の尺度である。	290	32	73	9
434.	貧民は社会の揺らん期から今日に至るまで，唯一その慎慮的習慣だけによって生活の必需品および便宜品	291	7	73	12

	のかなりな割合を支配することができている。				
435.	労働の価値にかかわるリカードウ氏の尺度は労働者の境遇よりもむしろ利潤率と関連していて，次章で考察をくわえられるであろう。	291	20	74	3
436.	**第5章　資本の利潤について**	293		77	
437.	**第1節　利潤が生活資料を入手する困難の増大によって影響をうけることについて**	293		77	
438.	正確にいうなら，資本（capital）は資財（stock）とは区別されねばならない。それぞれの定義。	293	1	77	1
439.	利潤とは商品の生産に要する前払いの価値と，生産時点での商品の価値との差額である。	293	17	77	9
440.	利潤率はこの差額が前払いの価値にたいしてとる割合のことであり，また前払いの価値と生産物の価値との間の比率を変更するあらゆる原因によって変動する。	294	5	78	3
441.	労働は生産に要する前払いの主部を構成している。また食物を入手する困難，ならびに労働者各々に与えられる食物量，これら2つが労働の経費に影響を及ぼす主因である。	294	22	78	10
442.	これらの両因のいずれが単一で起爆剤となったとしても，利潤はあらゆる変動をこうむる。	295	5	80	1
443.	もしも前者の原因が単独で作用し，しかも労働の賃金がいつまでも同じであるなら，より貧弱な土地がすき返されていくに応じて下落していくであろう。	295	14	80	6
444.	この場合，利潤はすき返された最後の土地の肥沃度にほぼ比例するであろう。	295	24	81	1
445.	とはいえ耕作と人口とが調和して増進している間，ずっと等しい穀物賃金であるというのは矛盾をはらんでいる。	297	1	82	1
446.	しかしながら資本および人口の絶え間ない増進を想	297	27	83	6

	定することは可能である。またそのさい一層貧弱な土地が耕作される結果，労働と利潤とへの分配はますます少なくなるにちがいない。				
447.	労働者が生産の困難に合わせてその物理的欲望を縮小できるとするなら，利潤率はそのままであるかもしれない。でも労働者はそうすることができないので，生産物の大きな割合をとり込んでしまい，その末に利潤は下落するほかない。	298	23	84	5
448.	利潤および真実賃金は当初最高であり，そしてともに漸次低減していき，ついには両方とも同時に停止するに至るであろう。	299	15	84	17
449.	他の商品と比べての穀物および労働の高い価値のせいで，また生産時点での商品価値と比較した場合の当然のように生じてくる商品の生産費の増加のために，製造業ならびに商業の利潤もまたあわせて下落するであろう。	299	26	85	5
450.	以上の増進のさい，利潤率はすき返された最後の土地の能力によって制限される。しかし制限はあくまでも規制とは別物である。	300	8	85	12
451.	**第2節　資本が労働にたいしてとる割合によって利潤が影響をうけることについて**	301		87	
452.	2つ目の主因は前払いの額を増加させて，利潤に影響を及ぼすのであるが，それは資本が労働にたいしてとる割合のことである（is であるべき原語が in となっている，手稿では訂正されている，Pullen ed., *op. cit.*, Vol. II, p.285）。	301	1	87	1
453.	現実に資本が労働に比べて過多であるときには，間違いなく低利潤である。資本が乏しくなければ，生産の安易さが高利潤をもたらすことは一切ない。	301	11	87	6
454.	1国の資本が増加の一途にあるにもかかわらず，何らかの不思議な力が働いてその人口を抑圧するなら，これだけの理由から，利潤率は千差万別となるであろう。	302	4	87	9

455.	利潤は当初高目であるであろう。その後資本が蓄積しようという動機が消失するほどまでに，労働と比べて一層すみやかに増加しつづけていくので，次第に低減していくであろう。	302	15	88	6
456.	いま仮想されている事例においては，利潤は現今と同じようにして影響をうけるであろうけれども，地代ならびに賃金はあきらかに別様な影響をこうむるであろう。	303	12	89	6
457.	土地ならびに資本の供給はともに潤沢であるから，地代および利潤は低目であるであろう。また労働は不足しているから，労働の賃金は高目であるであろう。つまりこのようにそれぞれの価値は供給および需要の原理にもとづいて確定されるであろう。	303	16	89	9
458.	1国の土地が量的には有限であるにせよ，隅から隅まで均質で，かつまこと豊沃であると仮定するなら，とどのつまり利潤ならびに穀物賃金は低くなり，同時に地代はとても高くなるであろう。	304	17	90	13
459.	こうした一連の仮定から生ずるであろう結果に立脚するなら，たとえ一層貧弱な土地を次から次へと耕作していっても，必ずしも低利潤ないしは高地代が出現するわけではないことがわかる。	305	16	91	10
460.	賃金についての2つの仮定のうちの前者のもたらす結果に目をやるなら，労働階級はその行使を望んだなら，自らの生産物の大半を取得できるという驚くべき能力をもっていることがわかる。	305	22	91	13
461.	富の増進において，資本と人口とはお互いに歩調をそろえない。またちがう時点での両者のまちまちな増加率のために，一時的であれ大変動が利潤率において引き起こる。	306	26	93	3
462.	政府の長期年金の価値はつねに資本の過多からなお減少に向かってはいくものの，20年有余の歳月もが流れれば，下落から高値へと一転するであろう。	307	22	94	1
463.	同一の原理に立って，利潤率を労働者が食物を入手	308	4	94	9

	する困難にだけ関連させて評価することができるとするなら，大きな実際上の間違いを犯すことになるであろう。				
464.	にもかかわらずリカードウ氏は利潤に関する章でこの原因だけに力点をおいている。	308	15	94	15
465.	リカードウ氏が仮定しているようなことを前提におくなら，氏の結論は正当であるであろう。しかし同氏が見すえた原因にくわえて，ほかの強力な原因が作用しているので，同氏の結論は経験とは相容れないにちがいない。	308	19	99	1
466.	リカードウ氏が述べているように，利潤は労働者の必需品を用意するのに要する労働量によって左右されるというわけではない。	309	15	100	9
467.	かりにリカードウ氏によって労働の自然賃金と呼称されているものが労働者の必需品を意味しているなら，その命題は事実に反している。なんとなれば利潤が労働者に支払われる必需品の価値に加えて，変動していく量によっても影響をうけていることに一点の疑問もさしはさむ余地はないからである。	309	22	100	13
468.	労働者の実際の稼ぎが必需品を意味するとするなら，その命題は穀物賃金の高低の原因を一切論外においているので，根本的に不完全である。	310	12	101	8
469.	労働者に与えられる食物量を確定するにあたっては，アダム・スミスが提出し，リカードウ氏が異存を呈した需要および供給の原理や競争の原理への言及をさけることはできない。	310	24	101	16
470.	高利潤の永続の原因として，資本の供給不足と伍するものはまったくない。	311	5	102	6
471.	ポーランドやアメリカといったような国々では，労働にたいする資本のさまざまな割合が利潤率の差異をもたらすが，そのことはリカードウ氏の利潤論の一端にさえ編入されていない。	311	5	102	10

472.	リカードウ氏がほとんど脇目もふらずに照射してきている利潤下落のかの原因を過小に評価するつもりはない。それはひっ竟ほかのいずれの原因をも圧倒するほどの性質を有するものである。	312	4	103	7
473.	しかしその（本章で考察された原理の）究極の力は計り知れないとはいえ，その進行はとてもゆるやかであり，それはかなりな星霜を経るうちにほかの原因によってすっかりとってかわられてしまう羽目に陥る。	312	27	104	2
474.	**第3節　事実上作用している原因によって利潤が影響をうけることについて**	313		105	
475.	物事の実情においては，既に言及済みの2つの原因が関連し合って作用し，かつまたほかの原因によってさらに修正をうけるであろう。	313	1	105	4
476.	もしも一層貧弱な土地がとぎれることなく耕作されていき，またそれと同時に農業上の改良が生じていくならば，後者が原因となって利潤を引き上げる作用は前者が誘因となって利潤を下落させる作用を相殺して余りあるであろう。	213	6	105	4
477.	個人的努力が労働階級の間で増加すれば，利潤が下落していく自然的傾向に歯止めをかけて，同じ結果をもたらすであろう。	314	8	106	1
478.	いま言及したばかりの2つの事情は生産の経費を低落するのに役立つ。けれども利潤は原価ばかりでなく，価格とも連動して変動する。	315	6	107	1
479.	したがって生産費に相応の騰貴が生じなければ，穀価の値上がりが利潤へ相当な影響を及ぼすであろう。	315	17	108	1
480.	上記の3つの事情はみんな一層貧弱な土地の耕作からの結果を相殺する傾向をもっている。またこれらがどのくらいそうした結果を緩和したり，あるいは克服したりすることができるのかを言い表わすのは難しい。	316	15	109	1
481.	主として農業利潤が詳述されるのは，その問題の核心がすべてそれに依存しているからである。	316	24	109	6

482.	しかしたとえ土地の状況によって左右される利潤の下落のかの原因が最後には作用するということを十二分に了承するとしても，それでもなおそのゆるやかな進行，ならびに他の原因による中和によって，競争の原理には作用していく余地がたっぷりと残されている。	317	11	110	9
483.	以上のことはわが国に起こってきた諸事実で例証されうる。	317	32	111	3
484.	前世紀から今世紀初めにわたって，多量の新開地がすき起こされてきたにもかかわらず，前世紀初頭における貨幣の利子，および資財の利潤は現世紀の初期に比べるとはるかに低かった。	318	8	111	8
485.	これら両時期における利子率ならびに利潤率の相違は，その礎石をすき返された最後の土地の自然的性質においている利潤論とは真向から対立する。	320	4	113	7
486.	これらの事実がその下に起こった事情は，それが資本の過剰あるいは不足と関連していたことを物語っている。そして問題は，上述の原理が一層貧弱な土地をすき返すことによる結果を超克するほど自由自在に働きえたかどうかである。	320	13	114	1
487.	誰の目にも過剰な資本の時期と映る最初の時期においては，穀物は下落し，賃金はかえって騰貴したが，そのことは早速資財の低い利潤を説明するであろう。	321	6	115	1
488.	資本が大いに需要されていた時期にあたる第2の時期においては，一層貧弱な土地をすき返したことの結果を相殺するのに役立つ原因が，残らず作用していたようにおもわれる。	322	8	116	3
489.	1793年から1813年にかけての農業利潤率の増大は，穀物賃金の減少によるよりも，同一数の家族によって入手された農業生産物の価額の増大から生じた。	323	28	120	6
490.	言及された原因の幾つかは一部分偶発的なものではあったけれども，行く末を占うにあたっては，その時代がそれを望む場合には，なおそれらがかなりな程度作用するのをあてにすることができる。	324	22	121	4

491.	かりにはるかに遠い将来が資本にたいする大需要をもった戦時であり，また過剰資本を抱えた平時に酷似した時期であるなら，資財の利潤は来たる次の20年間におけるよりも20世紀はじめにおいての方がおそらくより高いであろう。	325	11	122	1
492.	利潤を下落させる原因としてかたくなまでに資本の相対的過多と競争とを力説するさい，アダム・スミスはすき返された最後の土地をほとんど一途に強調している人々に比べて，事実上ずっと真実に近づいている。	325	24	122	7
493.	**第4節　リカードウ氏の利潤論に関する論評**	326		124	
494.	リカードウ氏の利潤論は，貨幣賃金がどのように変動しようと，賃金および利潤がつねに相伴って同じ価値を形成するという事態のいかんにかかっている。	326	1	124	1
495.	貴金属が資本の手を借りずに均一の労働量によって入手され，かつその場合において，それらがほかのどの場合においてよりも一層変わることなく同じ価値を保持していくであろうと仮定するなら，上の結論はいまなおきわめて注目すべき真実であろうようにおもわれる。	327	14	125	1
496.	この仮定に立てば，リカードウ氏がその根源を貨幣賃金の騰貴に帰している利潤に及ぶ同じ影響は，一様に商品の貨幣価格の下落，ならびに穀価の軽微な上昇から生じるであろう。	328	15	126	5
497.	需要および供給の原理は価格が下落する程度を確定するであろう。またこれらの価格は労働の均一価格と比較されれば，利潤率を規制していくであろう。	328	24	126	9
498.	多くの場合において，価格の下落は利潤の下落の主因であり，かつ競争によってもたらされるであろうけれども，リカードウ氏はまるっきり価格の下落を利潤の低落を引き起こすものと考えてはいない。	328	31	126	12
499.	競争の原理にもとづくなら，穀価が輸入によって大幅に引き下げられる場合，わが国における資財はあまり高くないであろうとみなすのは理にかなっている。	330	5	131	1

500.	農業上の永続的改良は利潤を減少させないまま資本の使用にたいして最大の活動領域を提供する。	330	22	132	1
501.	その土壌の性質が貧弱であれ，そのほとんどを耕作することができるとても広大な地域では，農業上のとぎれることのない改善によって，おびただしい量の資本が数百年にわたって利潤をいささかも下落させずに使用されえる。	332	8	134	4
502.	たとえ穀物を自由に輸入しているとしても，豊沃な小地域では，上の場合において蓄積された資本のうちの3分の1を使用するに至るまでに，その利潤を大幅に引き下げるであろう。	332	16	134	8
503.	その穀物の相当な部分を輸入している国においては，利潤の下落はおそらく穀物の地金価格の騰貴からばかりではなく，穀物と交換，購入される財貨の地金価格の下落によっても引き起こされるであろう。	332	25	135	1
504.	わが国の最大の輸出品，すなわち綿製品に関して，上述の利潤論にしたがうなら，労働の賃金の下落は高利潤をともなうはずであるけれども，実際には利潤の下落を随伴させてきている。	333	6	135	7
505.	綿業があきらかに供給過剰であるといわれるなら，高利潤によって資本の付加を求めているほかの相当な事業が指摘されえるかどうかが問われるであろう。	333	28	136	5
506.	利潤の下落の原因に注意を向けるとき，商品の下落に気をとめず，賃金の騰貴だけに関心を払うなら，その場合，問題の半面にしか光があてられていないことを認めなければならない。	334	15	136	16
507.	しかしどの仮定によっても，生存資料を生産する困難の増大いかんによっているあの偉大なる制限原理がつねに作用せんとしていて，しかもとどのつまり利潤を下げるにちがいない。とはいえこの原理でさえ供給および需要の法則に逆らわずに作用する。	334	28	137	5
508.	土地が不毛の度を深めるにつれ，どうして利潤が必然的に下落していくのかといえば，それはおそらく必	335	8	137	11

	需品にたいする有効需要がその増加した生産経費に相応して増大しえないからである。				
509.	すき返された最後の土地がちょうど資本を入れ替えるにとどまり，しかもその土地の耕作にたずさわった人口を扶養するにすぎない場合，穀物にたいするさらなる需要は間違いなく終わりを告げる。	335	19	137	16
510.	けれどもまぎれもなくその影響はつねに需要および供給の原理次第であるので，ある一定量の蓄積が利潤にどんな影響を与えるか，これを前もって先見するのは不可能である。	335	30	138	6
511.	**第6章　富と価値との区別について**	337		141	
512.	労働が一切ないのに商品をもっとも潤沢にもっている国は，まったく交換価値を有してはいないけれども豊かであるであろう。	337	1	141	1
513.	しかし人間が現世でおかれている実際の状態においては，富と交換価値とは間間仮定されているよりもずっと緊密に関連している。	337	13	141	7
514.	よりたくさんの同質の商品が同じ原価（手稿では，「前払い原価」となっている，Pullen ed., *op. cit.*, Vol. II, p.286）で改善された機械によって入手されるときには，富と価値との区別は明白である。しかしこの場合でさえ増加した量の持主は交換を目的としてではなく，ただ消費するつもりで富裕であるにすぎない。	338	17	142	6
515.	諸種の物品を比較するさい，それらが与えてくれる富の程度を評価する仕方は，それらの相対的交換価値によって表示され，それらが保持し合うところの相対的評価による以外には存在しない。	338	29	142	14
516.	しかしながら富は必ずしも価値の増加に相応して増加するとは限らない。そればかりかその商品が社会の欲望に合致しないなら，富は商品の単なる量に比例して増大するわけでもない。	339	23	143	11
517.	富は幾らは生産物の量に左右され，また一部は生産	340	24	144	11

	物に最大の価値をもたらすほどに，つまりそれが社会の欲望ならびに能力に適応するかどうかにかかっている。				
518.	けれども富と価値とがもっとも密接に関連しているのは，富を生産するのに価値を欠かせない場合である。	340	29	145	3
519.	事物の実際の状態においては，商品の価値，すなわちそれを入手するのにすすんで払おうとする犠牲があればこそ，まさにある量の富が実在するといっても過言ではない。	341	26	146	2
520.	富が生産されるときには，商品の市場価格が近因なって，社会のあらゆる主な活動をもたらし，しかもこれらの市場価格がその交換価値をも示す。	342	21	146	14
521.	価値あるいは交換価値という用語は，本書では終始第2章で説明を付した広義に理解されていて，断じてリカードウ氏が用いたはるかに狭い意味で解されてはいない。	342	31	147	1
522.	**第7章　富の増進の直接原因について**	345		149	
523.	**第1節　特殊な研究目的の説明**	345		149	
524.	特殊な研究目的とは，さまざまな国において生産力を引き出すのにもっとも効果のある原因を突きとめることである。	345	1	149	1
525.	この点では，道徳的および政治的原因が何にもまして重要である。けれども主として経済学の分野によりぴったりにおさまる原因に照射するつもりである。	345	17	149	9
526.	財産の安全ではまったくといっていいほど根本的にちがわないのに，多くの国は大きな生産力を有しながらも貧しく，また多数の国は不十分な生産力であるにもかかわらず比較的に豊かである。	346	22	150	10
527.	一定期間が経過しても，1国の現実の富がその生産力にある程度つり合っていかないなら，生産しようとする刺激が欠如してきたことは争われない。そして考	347	4	150	17

	察されるべき実際問題は，富の増進にもっとも直接的でかつ有効な原因とは何であるのかということである。				
528.	**第2節　富の不断の増加への刺激の1つとみなされる人口の増加について**	347		152	
529.	ただ欠乏だけが，すなわち労働階級の間にみられる生活必需品の欲求だけが生産にたいする十全な刺激であるなら，大地は比較上，住民であふれ返ったであろう。	347	1	152	1
530.	その労働が求められないときには，労働しかもっていない人間が生産物への需要をつくることは一切ない。	348	15	152	13
531.	資本の使用を正当化するには，雇用された働き手による需要から創出されるであろう需要を超過するそれにたいする需要が不可欠である。	348	27	153	6
532.	人口の増加が賃金を下落して，利潤を引き上げるという結果はまったく限られていて，そのうえほどなく需要の欠乏によって抑制されるにちがいない。	349	13	153	15
533.	経験とすり合わせるなら，ただ人口だけから生じる刺激がもっとも大きい国々では，富の増進はしばしばもっとも緩慢になされるということがわかるであろう。	350	5	154	10
534.	人口が激しく生存資料の限界を圧迫して，富の増加にかなった刺激となるかどうかが，実際上，問題である。そして世界の大半の国の状態はこの問いに否定的に解答している。	350	30	155	6
535.	**第3節　富の増加にたいする刺激の1つと考えられる，蓄積つまり資本に追加するための収入からの貯蓄について**	351		156	
536.	たんなる人口を富の増加にかなった刺激として受け入れない人たちは，万事を蓄積のいかんにゆだねる。そしてたしかに収入からの貯蓄が資本に付加されることを除いて，資本を増加する手立てはない。	351	1	156	1
537.	とはいえ国民を蓄積しようという気持ちにさせ，か	352	5	156	7

	つ富の不断の増加に有効な蓄積をもたらすのは何であるのかを探究しなければならない。				
538.	収入からの貯蓄が資本に追加されれば，生産物はその需要よりも一層速く増加するであろう。	352	11	157	1
539.	若干の有能な著述家たちによれば，商品の供給過剰は全般的でないと考えられてきた。しかしこの学説は根拠を欠いているようにおもわれる。	353	11	162	1
540.	現に，商品がいつも商品と交換されているというのは本当ではない。商品の大部は労働と交換され，しかもこうした労働と比べて，価値において下落するであろう。	353	32	163	3
541.	商品価値が労働と比べて全般的に低下し，利潤がほとんど皆無にまで低下するなら，これはまさに全般的供給過剰を意味している。	354	10	163	9
542.	セー氏，ミル氏，およびリカードウ氏はこの問題について見解を呈しているが，幾つかの根本的なとりちがいに陥っているようにおもえる。	354	24	164	7
543.	まず，彼らは商品を相互の間だけについて考察していて，消費者の欲望を視野の外においてしまっている。	355	5	164	10
544.	商品同士が比べられるにすぎないなら，彼らの学説は真実であるであろう。けれども商品が消費者の欲望と比較されるなら，それは下落し，ついには蓄積する能力と意志との両方をも抑制するであろう。	355	11	165	3
545.	有効需要とはただたんに１つの商品を別な商品との引き換えで提供するということではない。それらはともに投じられた労働を上回る労働を支配しえない。そしてこの場合，それらのいずれにたいする有効需要も絶無である。	355	27	166	1
546.	新たに市場に投入され，高利潤を生み出した商品は，量のたんなる増加とはまったく別物であって，確実に需要を増加するであろう。というのもそのことはその生産物が社会の欲望に一層かなっていることを意味し	356	12	167	1

	ているからである。				
547.	リカードウ氏は，資本が労働よりもすみやかに増加するときには，商品の一時的な供給過剰があるかもしれないことを認めている。しかしこのことは，資本が一再ならず過剰になりうることをも容認している。	356	28	168	1
548.	この問題に関するもう1つの間違いは，怠惰，あるいは安易の愛好というようなきわめて重要な人間性の原理の1つが及ぼす影響を対象外に放置していることである。	358	1	169	8
549.	一群の農業者ならびに一団の製造業者が各々必需品にくわえて奢侈品をも生産するなら，それらの市場に関して難題は一切ありえない，従来こう想定されてきた。	358	6	170	1
550.	しかし以上においては，奢侈が怠惰より選好されるということや，各々の側の利潤が収入として消費されるということ――いずれもまさに未決の争点である――を当然のこととして前提においている。	358	20	170	7
551.	どちらの側においてであれ，怠惰の方が奢侈よりも選好されれば，ただちに需要の不足を引き起こすであろう。また勤労をほどよく刺激するであろうような奢侈にたいする嗜好は，ゆるやかに成長するものであることを，歴史は物語っている。	358	27	170	11
552.	3つ目の，かつもっとも重大な誤りは，有効需要が蓄積によって引き受けられると仮定している点にある。	359	24	172	1
553.	リカードウ氏によれば，その需要される物品の種類を問わず，費消されようと，貯蓄されようと，1万ポンドは一律に需要とみなされている。	359	32	172	5
554.	この原理にもとづけば，ただ便宜品ならびに奢侈品が全般的に節約されさえすれば，大量の必需品が生産されるであろうと推察される。けれどもこのことは蓄積への動機が一転しない限り，起こりえないであろう。	360	13	173	3
555.	肥沃地という証は，それを耕作するのに要する人数	361	5	174	1

	よりもずっと大勢を扶養することができる土地であるということである。また地主がこの剰余を貯蓄してしまうなら，つまりより多数の労働者をその土地で働かせることに剰余を使用するなら，地主は豊かになるどころか，かえって貧しくなるであろう。				
556.	耕作者は剰余物を実現することができないと自覚すると，その土地に同量の労働を使用するのをとりやめるであろう。またこのような節倹の習慣は巧みに耕作しようとする動機を奪い去り，かつて豊かで人口稠密であった国を，比較的に貧しく，人口の稀薄な国に変容させるであろう。	361	22	174	10
557.	先に仮定された農業者ならびに製造業者の群の場合には，双方がお互いにそれぞれの生産物および奢侈品を消費している間は，万事が順調にすすんでいくであろう。しかし彼らが先に備えて貯蓄し始めるなら，すぐさま需要不足が実感されるであろう。	363	5	176	1
558.	耕作者が借地人であるなら，その土地に与えられた配慮や労働の上乗せはすっかり拾て去られるであろう。また耕作者が地主であるなら，その習慣を変えるか，あるいはまた剰余物を拾て去って，はじめて将来においてその土地をもっとも有利に耕作できるであろう。	364	1	177	2
559.	製造業者の群が貯蓄することで境遇を改善できる可能性はなお一層少ないであろう。すなわち蓄積にたいする情熱によって間違いなく商品の供給がその需要を上回るということは，まったく疑う余地のないようにおもわれる。	365	4	178	10
560.	したがって，あたかも両者が一様に需要を引き受けるとあてこめるかのように，支出にたいする情熱と蓄積にたいする情熱とを一括するのは，もっとも重大な誤びゅうである。	365	26	181	1
561.	生産物が分配されるさい，労働は必需品では満足いくほどには支払われないけれども，製造品が廉価であるゆえに，その大部分の価値を吸収するであろう。	366	11	181	7
562.	農業においては，同じ生産物のすべての部分が同じ	367	14	184	1

	価値をもっていないであろう。労働者の賃金はある点以下には低落しないけれども，穀物の供給の一部は富の特質を喪失するであろう。				
563.	耕作者が納得いく利潤ではその土地に資本を減らして使用できるほかなく，しかも残余の資本の用途をまったく見出せえないなら，それは耕作者にとって利潤が一般的に低められる場合と同じことであろう。	368	14	185	6
564.	資本家が取りそこなったものがすべて労働者の手に帰するなら，リカードウ氏が論述しているように，その害悪は一時的であるであろう。しかし貯蓄がある点を超えておしすすめられれば，利潤に立ちはだかり，しかもあわせて労働者を失職へと追い込むであろう。	369	6	186	7
565.	節倹さらには消費の一時的減少でさえもときには有益で，かつ必要である。しかしどの国民もおそらく消費の永久の減少から生ずる資本の蓄積によっては富裕になりえない。	369	19	187	1
566.	蓄積しようとする動機が急激になえない限り，資本の蓄積にたいする限界はまったくわけなく超えられるであろう。	370	11	188	1
567.	利潤率ならびに資本の増進を規制している法則は，労働の賃金と人口の増進とを規制している法則と驚くべきほど類似している。	370	23	188	7
568.	リカードウ氏は，労働者の食物を入手する困難が利潤の下落の唯一の絶対不可欠な原因であることを示して安んじてきたわけではない。だけれども氏は首尾一貫してある程度の永続性をもつということのほかに，原因は存在しないと主張している。	370	27	188	9
569.	たとえ人口がその領域の面積や容量に比べて大いに不足しているとしても，人口はその需要や扶養してくれる実際の支持資料と比べるなら過剰であるであろう。	371	16	189	6
570.	同じように，資本はたとえ商品の有効需要や，それを生産するであろう資本と比べて過剰であろうとも，領域ならびに人口と比べるなら大いに不足しているで	372	10	190	3

	あろう。				
571.	上述の2つの場合に何よりも要望されるのは，商品に適当な価格を支払う能力と意志とを兼有している人々による商品需要である。	372	99	191	1
572.	人口がにわかに減少した後に急速に回復する理由と同じわけで，資本は戦時期にすみやかに立ち直る。	373	24	192	5
573.	可能な限り戦争を回避するのは政府の義務である。しかし戦争が避けられえないなら，需要の変動を最小限に食い止めるよう支出を調整するのが政府の義務となる。	519	27	387	1
574.	租税を廃止すれば，ほかの階級がしばしば救済される。労働階級にたいしてその需要不足を埋め合わせてくれるものは何もない。	521	5	388	13
575.	以上のような事実を述べるのは，租税に同ずるためではなく，あまり必要性もないのに租税を賦課することに反対して，その理由の補足を提出するためである。	521	21	389	3
576.	労働階級は好況時に高賃金によって利益に浴するよりも不況時において低賃金によってずっと多く苛まされる。変動は労働階級にとってもっとも不利に働く。社会の大衆の利害は平和およびむらのない支出を必要としている。	521	31	389	10
577.	どちらの場合であれ，前もっての減少がなければ，同じ増加率は引き起こってはこないであろう。	374	10	193	1
578.	富の間断なき増大という観点に立てば，度を超して貯蓄をおしすすめることも，程度を超えて人口を押し上げるのと同様にひとしく無益である。	375	3	193	9
579.	**第4節　富の不断の増加への刺激の1つとみなされる土壌の肥沃度について**	375		195	
580.	肥沃な土壌は瞬く間に1国が達成しうる富の自然的潜在力を最大限にまで引き出す。また肥沃な国の富の不足が云云されるときは，絶対的というよりもむしろ	375	1	195	1

	比較上の意味で口にされる。				
581.	たいへん豊沃な土壌の住民が当初は欠陥だらけの財産の分割の下におかれ，また市場の点でも不利な場所におかれているなら，富および人口はとてもゆるやかに増加するであろうし，かつ住民が怠惰な習慣を身につけることも大いにありえるであろう。	376	11	195	11
582.	経験に照らせば，労働を支配する人々がいつも労働を適切に使用して，その欲望や願望をみたせるとは限らない。より精巧な製造業を起業するには，つねに時間と困難とがともなうことが確認されている。	377	19	197	2
583.	ある個人の働き手が食物を入手するのに従事するべき時間が，少なければ少ないほど，より多くの時間を奢侈品にあてることができる。	378	24	198	4
584.	生活の便宜品ならびに奢侈品の生産者が実際にそれらを楽しみたいという一心以外にどんな動機をももちあわせていないなら，それらは不足するであろう。主として労働階級を刺激して奢侈品の生産へ向かわしめるのは必需品の欠乏である。	379	9	199	3
585.	耕作の初期には，もっとも豊沃な土壌だけが利用されているにすぎず，総じて人民の大部分が土地にたずさわっているのを知見する。そのことは，食物を手に入れるのが容易であればあるほど，より多くの時間を奢侈品の生産に割くであろうということが事実である場合に，起こってくるであろう事柄とは正反対である。	379	31	199	10
586.	イングランドは大多数の国々と比較して耕作を数等おしすすめてきている。ヨーロッパ，あるいは世界のどの大国と比べても，その住民のより少ない割合が土地にたずさわっているにすぎない。	380	21	201	1
587.	もしも生産の容易さが国民の勤労の成長を阻害するなら，実際にはもっとも肥沃な土地が不生産的になってしまうであろう。	381	14	202	4
588.	同じように，個々人が食物を手軽に入手しえるために怠惰の習慣を身につけるなら，その人は便宜品およ	381	25	203	4

	び愉楽を所有するという奢侈よりもほとんど働かないという奢侈の方を選好するであろう。				
589.	フンボルトが記述しているように，アメリカにおけるスペイン領の状態がこうした実態を如実に示している。	382	11	203	11
590.	バナナという生産物はそれに使用された労働に比べれば，夥多であるので，バナナが普及している地域の居住民は，バナナの生産が禁止されてはじめて行き過ぎた怠惰から目ざめるであろうと言われている。	382	17	204	1
591.	労働階級は便宜品および愉楽品のために働く時間をまったくたっぷりともってはいるけれども，それらをほとんど欠いている。おまけに無用心な習慣から食物の欠乏で苦しむことさえ間間ある。	384	11	206	11
592.	上述の貧困はニュー・スペインの低地地方に限られているわけではない。コルディレラ山脈へ登って世界でもっとも健康によい気候のところへ辿りついても，事物の状態はまったく同じままである。	385	3	207	6
593.	トウモロコシはコルディカ山脈にだかれた人々の主食であり，生産性においてヨーロッパの穀類をはるかに凌駕している。	385	12	207	11
594.	メキシコにおいてすら，生存資料は週に1日ないし2日の労働で手に入れることができる。それにもかかわらず人民はあまりにも貧民でありすぎる。	386	9	208	10
595.	同じ貧困は田舎の地域にも広くまん延している。そのうえトウモロコシの不作が人民の怠惰や無用心と相まって飢餓を頻発させている。フンボルトはこれを人口にたいするもっとも破壊的な妨げであると述べている。	386	29	209	4
596.	こうした怠惰および無用心の習慣は間違いなく富と人口との急速な増大の途上においておそるべき障害として作用する。	388	7	210	6
597.	原住民の怠惰はその政局でさらに増長される。とはいえ急速な耕作が新鉱山の近辺で生起することが実証	388	19	210	13

	しているように，怠惰は依然として刺激(excitement)や需要には屈する。				
598.	新鉱山の近辺，ならびに大都市の四隣を除けば，生産物にたいする有効需要は大土地所有者をさそってその広大無辺の土地をすき返させるほどではない。	389	6	212	1
599.	インディアンの借地人は穀類を培っていては，その土地が牧草地の状態で産み出すものに匹敵する地代を支払いえることは滅多にないであろう。	389	21	213	1
600.	地主はその地所で大きな人口を扶養するに足る能力をもってはいるけれども，その意志をもちあわせていない。くわえてスペイン領アメリカでは，商業や製造業は不十分であるので，その資源の割には，人口も稀薄のままにとどまるであろう。	390	19	214	3
601.	その能力に比較した場合のニュー・スペインの現実の貧困は，フンボルトによって正しくも消費者の欠乏，すなわち有効需要の欠乏に帰せられている。	391	27	215	6
602.	ニュー・スペインにおいて富の増進を緩慢にしているのは，資本の欠乏というよりもむしろ需要の不足である。このことはフンボルトが指摘している資本の潤沢から推察されるであろう。	392	30	216	9
603.	ひっくるめて，ニュー・スペインの状態は土壌の肥沃度だけでは富の増大にかなった刺激ではないことを鮮明に例示している。	393	14	217	4
604.	アイルランドの状態は1つの類似した結論を引き出すであろう。そこでは働く階級がジャガイモを一般食としてとり入れ，家族を養うのに要する労働が異常なまでに微少で済んでいる。	393	28	217	14
605.	アイルランドはなされるべき仕事の分量に要する以上の多大な人口を保持していて，このことの当然の成行きとして怠惰の習慣が産み出されている。そして実際，必需品および労働を支配している人々は，その代償として求めるものを手にしてはいない。	394	14	218	7

606.	経験からあきらかなように，アイルランドの労働者は時間をおしんでとっておくが，それが彼に十分な量の便宜品および奢侈品を所有させることはない。	395	27	221	1
607.	アイルランドの小農民は，人民がなされるべき仕事に比較して過多であるために，勤労を創出する通常の刺激をうけてこなかった。	396	11	222	2
608.	もしもアイルランドの小農民の労働が，屋内においてであろうと，農地においてであろうと，どちらであろうとも，つねに需要されているならば，その習慣はほどなく変化するであろう。	397	26	223	12
609.	資本のみでは要求される目的を達成しないであろう。なぜなら国内外の市場の現状において，あるいはまたこうした資本が使用された後に予想される市況において，その生産物にたいする適当な需要がないであろうからである。	398	5	224	1
610.	概して，アイルランドの製造業と生産とがこうむってきた妨げは，資本の欠乏によるよりも需要の欠乏により多く因由してきている。資本はときには需要を生みそこなってきたけれども，需要は大体資本を生み出してきた。	399	29	226	1
611.	もしアイルランドの過剰人口が商業ならびに製造業に使用されるなら，アイルランドはイングランドに比べてずっと富裕になるであろう。しかしこの目的をかなえるには，習慣の変化の方が資本の尚早な供給よりもはるかに有効であるであろう。	400	14	226	10
612.	アイルランドの状態は富の増進に主として影響を及ぼす原因について，ニュー・スペインの状態とほとんど同一の結論へと導いていく。	401	6	227	5
613.	**第5節　富の不断の増加への刺激の1つとみなされる労働を省力化する**（本文では，原語がabridgeではなく，saveとなっていた，Pullen ed., *op. cit.*, Vol.II, p.468）**発明について**	401		229	

614.	筋肉労働の節約はおおよそ改良の進行の途上での人類の欲望によってもたらされる。したがって人類の欲望を大きく超えてしまうことはほとんどない。	401	1	229	1
615.	とはいえ肥沃地についてと同じ法則が機械にもあてはまる。すなわちいずれの場合も適当な市場がなければ，十分に利用されえない。	402	12	229	9
616.	機械はその自然的すう向として，生産された商品を低廉にし，市場を拡大して，その総価値を増大させる。このことは綿貿易において目立って顕在してきている。また機械がこの成果をもたらすときは，その富裕化能力は桁違いである。	402	18	229	12
617.	資本や労働が機械によって個々の使用から追いたてられるときでも，機械から得られる利益は依然として大きい。しかしそれは偶然に左右されている。	403	13	230	13
618.	この原理の真偽をためすために，機械を大いにおしすすめ，くわえて外国市場の拡大が一切ないままで，現在使用しているあらゆる商品がいま用いられている労働の3分の1で取得されると仮定するならば，勤労という努力が弱められると考えるのがまったく理にかなっている。	404	22	237	1
619.	1国の所得が大いに勤労および努力のいかんによっているときには，達成されるべき目標のなかに好ましいなにものかがあるにちがいないか，それとも勤労ならびに努力が引き起こされないであろうか，のいずれかである。	405	22	238	1
620.	外国商業を失った状況で，既に形成されている嗜好を満たそうとする努力が実際に獲得された富を維持していくと想定されえる場合には，機械が増加する可能性はほとんどない。もし外国市場がなかったなら，それが同じ額に到達することはなかったであろう。	406	20	239	10
621.	機械によってもたらされるわが国の輸出高，およびそれらと引きかえに受けとる対価に目を向けるなら，上記のことが確信されるであろう。国内では，こうした対価の有効な代替品を見つけ出しえなかったであろう。	407	12	240	4

622.	もしも外国商業がエドワード1世の時代からずっと絶えていたとするなら，土地だけからのわが国の収入は現在の額に接近することはなかったであろうし，また貿易および製造業からのわが国の収入もなおさらそうであったであろう。	408	19	242	1
623.	工業製品ならびに市場の拡大から生じてくる刺激がなければ，ヨーロッパの大半の国々はその土地財産の分配が現在のままであったとしても，比較的に稀薄な人口であったであろう。	408	32	243	2
624.	もしもわが国が蒸気機関による生産物を輸出することができないまま今日に至っていたなら，わが国の蒸気機関は先の戦時期の間，その成果を大幅に減らしたであろう。	409	25	243	15
625.	機械がアメリカの鉱山に用いられれば，スペイン国王は巨万の富を掌中におさめるであろう。しかしかりにその生産物が市場をもとめて輸出されえないなら，その利益は無いにひとしくなるであろう。	410	1	245	1
626.	わが国が機械による生産物を輸出することができない場合に，資本が使用されずに放置されていても，同じように有効に国民収入を増加させるであろうとどうしていえるであろうか。	410	11	245	6
627.	1国はたしかにその生産するすべてを消費する能力をもち，しかもまたそれが現実に生産に用いているよりもはるかに多い労働を用いる能力をもあわせもっている。けれども通常の刺激がなければ，結果としてこれらの能力は発揮されないであろう。	411	12	247	1
628.	生産の容易さが適当な市場を開拓するであろうという予想がいつも立てられる。しかし市場が開拓されないなら，その利益は大幅に失われるということを認めなければならない。	412	16	249	1
629.	資本の蓄積，土壌の肥沃度，および労働を節約する発明は生産にもっとも直接に有利に働く原因である。けれどもそれらはそろって同じ方向に，かつまた需要とは無関係に作用するので，富の不断の増加にかなっ	413	5	250	2

	た刺激をもたらすことはできない。				
630.	**第6節　富の不断の増加を確実にするために，生産力と分配手段とを結合する必要性について**	413		251	
631.	生産力がその効果を発揮するためには，変わることなく生産物の交換価値を増加させつづけるような生産物の分配と，生産物がそれを消費しえる人々の欲望へ適応することとを欠くわけにはいかない。	413	1	251	1
632.	個々の商品の増大にたいする刺激はその市場価格の高騰である。同じように，1国の生産物にたいする強大な刺激は，一層多くの労働ならびに資本が使用されるのに先立つ生産物のよりよい分配によるその価値の増大である。	414	1	251	6
633.	もしも1国の生産物が消費者の欲望や嗜好に合致しないように分配されるなら，その価値は大きく下落するであろう。言い換えるなら生産物が消費者の欲望や嗜好によりぴったりとかなうように分配される場合には，その価値は増大するであろう。	414	17	252	5
634.	わが国における有料道路や運河を手立てとした首都との交通網の改善のお陰で，生産物の総価値はかなり騰貴したし，かつまたより多大な資本の使用に拍車がかけられた。	414	32	253	1
635.	1国の総生産物の交換価値は短期間では地金で測定することができる。	415	21	254	1
636.	より長い期間では，その交換価値はその地金価格によって支配しえるであろう国内外の労働で測定されるであろう。	417	7	254	9
637.	その特定の部分と同様に，一般的富はいつも有効需要を伴っている。総生産物がより多くの労働を支配するであろうときには，富は増加するであろう。別言するなら，それがより少ない労働を支配するなら，富の増進は妨げられるであろう。	417	1	255	9
638.	リカードウ氏が述べているように，それが100人の人	418	24	260	1

	間，あるいはまた200人の人間，いずれの人数の人間の努力によって生産されてきているとしても，一定量の必需品は同じ労働を実現するであろう。しかしかりに労働の真実賃金がどこであっても，いかなるときでも似たりよったりでないと想定するなら，このことは真実にはなりえない。				
639.	生産物需要が減少した場合，資本家はただちにこれまでと同じ量の労働を使用する意志と能力とをともに喪失するであろう。	418	24	260	1
640.	労働で評価した生産物の価値の増大は，富の妨げをうけない増加にとって絶対に欠かせない。またこの価値を保っていくためには，生産と消費との間に適当な割合をもたらすような生産物の分配が不可欠であるにちがいない。	419	1	260	6
641.	収入が急速に資本へと転換されて，上述のような価値を維持していけなくなれば，頭痛の種である価値の減少を一切もたらさずに，その必要性が痛感されている貯蓄をどのようにすれば引き起こせようか。	419	13	261	1
642.	収入が前もって増加する結果として，貯蓄は引き起こってくるであろうし，実際のところおしなべてそうである。蓄積にたいして強大な刺激を与え，かつまた富のひっきりなしの生産において貯蓄を有効なものにするのはこの事前の増加にほかならない。	419	23	261	6
643.	シスモンディ氏はある年の生産物の価値を前年の収入の価値に限定しているけれども，このことは価値の増大をはばんでしまうであろう。どんな年であっても，生産物のより良い分配がなされ，かつ生産物が社会の欲望へよりぴったりと適応するなら，交換価値や需要は躍増するであろう。	420	4	262	1
644.	商人の財産と同じように，１国の資産は増加した利得からの貯蓄によってつくられるのであって，支出の減少によっているわけではない。	421	16	263	1
645.	１国の増加していく富をその総生産物の増大していく価値で評価することは，その総生産物を犠牲にして	422	9	264	8

	総生産物を称賛するということではない。というのも純生産物を増加させる改善は，おおむねあわせて総生産物も増加させるからである。				
646.	総生産物を含んでいない富の定義が正当であろうはずはない。賃金で生計を立てている人々は社会のもっとも巨万の，かつ重要な部分（part）である。	422	28	265	3
647.	個々の資本家の利害は彼をして労働を節約するようかり立てる。しかも理論と経験とがともに，ひっ竟示しているように，こうした尽力は総じて総生産物の交換価値を増大させるのに大きく貢献している。	425	10	268	3
648.	生産と分配とは富の2大要素である。それらが妥当な割合で結合されれば，富をその可能な限りの限界にまで拡大できよう。	426	4	271	1
649.	**第7節　総生産物の交換価値を増大する手段とみなされる土地財産の分割によってもたらされる分配について**	427		272	
650.	分配にもっとも好都合な3つの原因は，土地財産の分割，国内ならびに対外商業，それに不生産的消費者の維持である。	427	1	272	1
651.	はじめて新植民地へ移住するさいには，人口原理の作用を引き出すには土地のおおらかな再分割を必要とする。	427	6	272	3
652.	北アメリカにおける定住者（establishments）の急速な増加は，新規の家族がその親の先祖からの分化をくり返しつつ，その土地にどれほど容易に腰をおちつけていけるかに大きくかかっている。	428	15	273	5
653.	封建時代に端を発し，ほぼヨーロッパ全域をおおいつくした土地財産の不正な分配は，中世においては耕作者ならびに富の増進をはばむ主因であった。	429	3	273	14
654.	困難なことは富者に美服への愛好心をあおり立てることよりも，むしろその巨大な財産を分割して，たいへんゆるやかにしかその効果をもたらしえるにすぎな	429	15	274	6

	いより多数の需要者を創出することである。				
655.	少数のとても富裕な地主や資本家たちが非常に大きな需要を創出するのは物理的には可能である。しかし実際には，有効需要に関しては，少数者の過度な富は大勢のより中庸の富にはまるで太刀打ちできないということがずっと知られてきている。	430	25	275	11
656.	しかしたとえ一定程までの土地財産の分割が富の増加に好都合であるというのが真実であるとしても，ある点を越えてしまうなら，それがかえって不都合となるのも同様に事実である。	431	24	276	9
657.	経済学においては富に関連するすべての主要な結果は比率次第であることがわかるであろう。そしてこの重要な真理はことさら土地財産の分割において明白である。	432	18	277	4
658.	財産の大きな再分割に関して，１つの実験が現在フランスで進行中である。その相続法は遺言によって財産のほんの一部を自由に処分するのを認めてはいるものの，財産を子供たち全員に均等に分与する。	433	11	278	1
659.	こういった法律はしばらくはヨーロッパのたいていの国々で施行されるであろう。しかしこの法律がずっとフランスの法でありつづけるなら，平等とともに大きな貧困をももたらすことになろう。	433	18	278	5
660.	このような財産の状態は現下の混合政府の維持にも，また完璧なまでに組織された共和政体にも不利であるであろう。	434	16	279	3
661.	しかし上述の状態は軍事的専制政治にとっては格好の温床であるであろう。軍隊は難なくその国における最富裕階級にのしあがるであろうし，そのゆえにこのような事態においては，軍隊は何ものといえども刃向かえない勢力を占めるであろう。	434	32	280	7
662.	大英帝国においては，かつて遍在した莫大な土地所有は，商業および製造業の繁栄によって分割されてきている。	435	15	281	1

663.	中流階級の大きな1集団が商業，製造業，および専門的職業から形成されてきていて，小土地所有者より一枚上手の有効需要になる勢いである。	436	11	281	14
664.	こうした事情の下で，長子相続権が撤廃されれば，その国の富は増加するであろうと推論するのは性急であるであろう。とはいえことがこの推論通りになりえる場合でも，それを理由に変革という政策が確定されることはないであろう。	437	4	282	9
665.	もしも貴族が実存していないなら，英国憲法を存続していけないと推察するのは理にかなっている。言い換えるなら，長子相続権が現存していてこそ，有能な貴族を維持しえるのである。	437	14	282	14
666.	長子相続法を廃止すれば，その国の土地財産がどの程度まで分割されるであろうかを云云するのは難儀である。ただし分割はおそらく仁政には荷担しないであろう。	438	3	283	9
667.	したがってたとえ土地財産のなお一層平等な分配が現に遍在している分配にまさっているとしても，長子相続法を廃止するのはおろかであるであろう。	439	3	284	8
668.	しかし広く行き渡っている法律がどんなものであれ，土地財産の分割が分配の主要な手段の1つであり，かつまた総生産物の交換価値を保ち，増大するのに寄与するという原則は変わらぬ真実であるであろう。	439	17	284	14
669.	**第8節　生産物の交換価値を増大する手段とみなされる，内外商業によって引き起こされる分配について**	440		286	
670.	1国において生起するどの交換も，結果としてその商品が社会の欲望によりぴったりとかなった分配をもたらすとともに，総生産物により大きな市場価値を付与するのに適している。	440	1	286	1
671.	エコノミストの主張によるなら，商業はある所では高すぎ，また別な所では低すぎる価格を均すにすぎない。けれども有益な交換の効果は両方の生産物の価値	441	15	287	1

	額を増大することである。				
672.	もしも国内商業が国民生産物の価値を増大するのに役立っていないなら，それは営まられはしないであろう。というのもそれにたずさわっている商人が利益を享受するのはまさにこの増大によっているからである。	441	31	287	10
673.	1国の勤労がその資本の多寡(extent)で確定されるとするなら，そのように取得された収入の価値が依然としてこの資本がどのようにして使用されるかにかかっているのは間違いない。	442	19	293	1
674.	1国の総生産物は貨幣および労働で市場価格をもっているといいうる。この価格が騰貴する場合には，生産物は増加する。つまり価格が下落すれば，生産物の増加は止むのである。	443	21	294	7
675.	商品を流通媒介物と関連させて，はじめて，商品がより多量な内外の労働を支配するように分配されているかどうかをつきとめうる。	444	4	294	15
676.	1815年の収穫から1816年の刈入れに至るまでの間，労働の維持のための基金は平常よりふんだんにあったけれども，欠陥のある分配のために，従来と同じほど多くの労働を支配しはしなかったであろう。	444	27	295	11
677.	多大な生産物がつねに有効に分配され，かつ消費されるであろうと推量するわけにはいかない。総生産物が価値において下落するなら，その分配は利潤を下落させて，生産を阻害する類であるに相違ない。	444	15	299	2
678.	総生産物の価値の究極の尺度として労働をとりあげるにさいしては，その生産物がその分配によってその分量にたいするある割合で労働を支配することができるかどうかをあきらかにするために，あらかじめその地金価格に触れておかねばならない。	447	7	300	1
679.	内国交易によってもたらされる商品の分配は，富および資本のなんらかの相当な増加に向けての第1歩である。	448	7	301	1

680.	外国商業を招来する動因は国内交易を先導する誘因と同じである。――とりもなおさず，利潤の増加であり，またほかの場合でいうなら，引き起こっていたであろう利潤下落の予防のことである。	448	32	301	13
681.	リカードウ氏が述べているところによれば，外国商業の拡張はただちにはけっして1国における価値額を増加させえない。しかし用いられている用語のふつう意味に服するなら，このことはまったく真実に反している。	449	11	302	1
682.	外国からの贈物，あるいはまた旺盛な冒険貿易（adventure）の異例の利得によって，幾人かの商人は一方でほかの商人を同等に貧しくしないうちに，富裕になるであろう。したがって結局全体の価値は増大するであろう。	450	9	303	3
683.	こうして取得された価値の増大は一層多くの労働を支配するか，それともこれまでの労働量に美ろくを支払うか，そのいずれかであるであろう。	451	16	306	1
684.	たとえ貨幣量をすぐさま増加することができなくとも，依然として，総生産物はより高い価値のまま評価されるであろう。	452	11	307	1
685.	しかしながら，たいへん順調な外国貿易はなべて，四方八方から地金を自国に流入させる。	453	5	308	1
686.	外国商品への需要が増加しても，その結果として国産品にたいする需要が必ずしもそれに応じて減少するとは限らない。	453	29	308	12
687.	舶来および国産品にたいする需要の総和は，国民所得によって制限をうけるであろう。けれどもその国民所得はほかのどの方面にも収入の同等の減少をもたらさずに，外国貿易商人の利潤の増加によってあれよあれよの間に増加されるであろう。	454	11	309	7
688.	商品が外国商業によって増加されるさいに，価値の増大を伴っていないなら，労働需要の停滞がたちまち感知され，くわえて富の増進も阻害される。	454	27	312	1

689.	賃金（手稿では，「貨幣賃金」と変更されている，Pullen ed., *op. cit.*, Vol.II, p.286）が騰貴しようと，また食料が下落しようと，労働者にとっては他人事ではない。前者の局面では，完全雇用が約束されるが，後者の場合には，おそらくはあぶれることになるであろう。	455 29	313 1
690.	個別商品の価格（手稿では，「諸価格」と変更されている，Pullen ed., *op. cit.*, Vol.II, p.286）は大幅に下落して，それらの個別の商品自体の価値とともに，あわせて全（general）生産物の総価値の大幅で，とぎれることのない増大とちょうど調和する。	456 24	315 1
691.	個別の商品の総価値が減少する場合においてでさえ，その結果として全生産物の価値が縮小されるであろうとなるわけではない。とはいえそれが現実のものとなれば，一時的な，もしくは永続的な貧苦を痛感するであろう。	457 11	316 6
692.	一般的に需要の活況を生み出す明白で，かつ直接の原因は，その生産物の貨幣価格が内外の労働の支配を拡大できるように，生産物が分配されることであり，また生産物がその社会の欲望や嗜好に適合していくことである。	458 9	317 10
693.	アメリカ合衆国における，ならびに1793年から1814年までのわが国における，進歩，それに需要と富との急速な増加を呈した注目すべき事例の全部とが上述の試練にたえるであろう。	458 27	319 1
694.	1国が順風満帆の外国商業を営み，しかも山ほどに膨張しつつある商品をひけらかすという事例は1つたりともありえないけれども，そんな場合においては，内外の労働で評価を定められた総生産物の価値は退歩するか，さもなくば停頓するかである。	459 22	320 1
695.	外国貿易が分配に影響を及ぼすあらゆる種類の交換のうちで，社会の欲望によりぴったりとかなう場合，その自然の成行きとして，利潤からなる国民収入のかの部分の価値がほどなく増大していくであろう。	460 8	321 1

696.	リカードウ氏は外国貿易を主としてより安価な商品を手に入れる手段とみなしている。しかしこれはその利点の一半だけに視線を注いでいるにすぎず，おまけにそれは多分大きい方の半面ではなかろう。	461	7	323	1
697.	わが国の外国商業の主部の利点は，あるちがった原理，つまりより求められないものがより求められるものと交換されるという原理にもとづいて評価をうける必要がある。	462	4	324	3
698.	したがって外国貿易，ならびに市場のあらゆる拡大は，分配によってもたらされる価値のかの増加にとっては段違いに有利であるとみなさられなければならない。				
699.	**第9節　総生産物の交換価値を増大する手段とみなされる，不生産的消費者によって引き起こされる分配について**	463		326	
700.	不生産的労働者が急速に生産的労働者へと転じ，物的生産物の需要がその供給に比べて時機の熟さないうちに衰微していく場合，大きな生産力を有する国は不生産的消費者の1団をもつ必要があるということになろう。	463	1	326	1
701.	自然は，土壌の肥沃度，機械の能力，それに私的所有制の下での努力にたいする動機という形で，余暇の準備をととのえてきた。そしてそれが受容されないときには，富の増進は加速されるどころかむしろはばまれるであろう。	463	20	326	11
702.	不生産的階級の生産的階級にたいするもっとも有利な割合を確定することはできない。その比率は土壌の肥沃度および人民の器用さで変動するであろう。	464	7	327	6
703.	その比率はまた生産者自身の間に広く行き渡っている消費の程度のちがいによっても変動するであろう。	464	24	327	14
704.	資本家はその利潤を残らず消費する能力を有してはいるけれども，概して，財産を貯蓄することをその生涯の大目的としているので，消費しようという意志を抱懐していることはめったにない。	465	3	328	4

705.	消費の欲求がその能力とつり合っているというのは事実に反している。1つの集団としてみるなら，商人ならびに製造業者は貯蓄のきらいがあまりにありすぎて，その生産物にたいする十分な市場を自分たち自身の間に見出せえないであろう。	465	20	328	13
706.	もしもほかの消費者の数が足りないために，商人がその利潤を実現しえていないならば，商人は自分でもっと多く消費するか，さもなくば生産を縮小するかしなければならない。また商人が後者の方法を選択するなら，その国の富はきっと害をこうむるにちがいない。	466	3	329	8
707.	リカードウ氏は貯蓄を目的とみなしているようにおもわれる。しかし国富との関連では，貯蓄を手段とみなすほかはありえない。また廉価な商品による貯蓄は，高利潤から生ずる貯蓄とはまるっきりちがった結果をもたらす。	466	31	330	11
708.	生産の増加の手段とみなされる国民的貯蓄は，現実の生産物需要をみたすのに有利に用いられうる貯蓄高のいかんによって制限されるにちがいない。	467	29	331	8
709.	消費しようとする傾向は怠惰の愛好やその境遇の改善のために貯蓄しようとする欲求によって強烈に弱化される。資本と人口とはともに生産物にたいする有効需要に比べて過多であるであろう。	468	11	332	5
710.	富が欲望を生み出すというのは事実ではあるけれども，欲望が富を生むということの方が一段と重要な真理である。国が文明を開き，富裕になっていくさいに直面する困難の最たるものは，人々に欲望を抱かせるということである。	469	22	334	1
711.	1家を支えるために財産を実現しようとする欲求は，努力にたいする強力な動機ではある。しかしほかに消費者が見当たらないという理由から，生産者が生産したそのほとんど全部をやむなく消費せざるをえない羽目に陥るなら，その動機は同じほどには作用しないであろう。	471	1	335	10
712.	かりにその親方生産者が消費をたっぷりとふやそう	471	19	336	8

	という意志をもっていないとするなら，労働する生産者の方はその能力を欠いている。かててくわえて，働く人々のみにおける消費では，資本の使用にまるで刺激を与えることはできない。				
713.	万が一にも働く人のそれぞれの消費が倍加されるなら，貧弱な土地の耕作は一切とりやめになるであろうし，おまけに蓄積しようという能力および意志もほどなく停止するに至るであろう。	472	13	337	8
714.	しかしながら，労働階級が度を超えて消費する危険はほとんどない。人口原理の働きで，その傾向はこれとは正反対である。	473	3	338	6
715.	富を目的とすることとはちがった観点に立つなら，労働階級は辛苦に陥るほど働くべきではないというのが望ましいであろう。とはいえこのことは働く人々がこぞって心にそう決めえない限りは，具現されえない。	473	16	339	6
716.	慎慮的習慣から期待される結果を唯一の例外として除けば，働く階級の間で消費が増加するという見込みは皆無である。またたとえそうした増加があるとしても，それは資本の使用を促すと大いにあて込むことのできる消費の類ではない。	475	4	341	1
717.	地主の需要が生産的階級の需要に付け加えられたときには，経験上，利潤がしばしば時機をまたずに下落してきたことは明白である。	475	18	341	8
718.	しかし親方生産者が消費しようとする意志を十分にもたず，かつまた働く生産者がその能力を備えていないなら，その上また，地主の加勢がたっぷりとなされないなら，必要とされる消費はアダム・スミスのいう不生産的労働者の間で引き起こるほかない。	476	27	342	11
719.	どの国であれ必ず不生産的労働者の1団をもっていなければならない。しかし彼らが1国の富を減じるのか，それとも富を刺激するのか，いずれであるのかを確定することは1番重要な現実問題である。	477	11	343	2
720.	この問題の解決はより大きな問題に決着つけるか否	478	1	343	13

	かにかかっている。1つは，蓄積しようとする動機が食物を入手する困難によって妨げられる前に，需要の不足からそがれるのかどうかである。そして2つ目には，このような妨げがありうるのか否かである。				
721.	本書の別な個所でこれらの2つの問題に確答しようとする試みがなされている。もしもこの回答が正しいなら，不生産的労働者の1団が富にたいする1つの刺激として欠かせないと帰結することができる。	478	12	344	2
722.	不生産的労働者の成員のうち，自分の手で支払いをかちとっている人々は，概して勤労を刺激するさいにもっとも役立つとみなされるであろうし，また生産費に打撃を与えて，損害を及ぼす可能性がもっとも少ない。	478	31	344	11
723.	租税で扶養されている人々は，分配に関しては一様に有用ではあるけれども，生産費の増加を引き起こしたり，また商業をかくらんしたりして害をもたらすであろう。	479	27	345	8
724.	以上の見地においては，たとえときには富を刺激しえるとしても，課税はとうてい推奨できないくらい危なっかしい分配手段である。くわえて課税が現実に働き，別な財産の分配をもたらした場合には，それ以上の変更をもたらす施策はいぶかられるであろう。	480	18	346	3
725.	分配が富にとっての必要要素であるなら，国債の全廃が間違いなく富を増加し，人々を雇用するにちがいないと確言するのは軽率であるであろう。	481	27	347	8
726.	もし十分な人口を擁する国において，生産力が3倍にふえるなら，分配手段が最大の難事となるであろう。その増大した生産力が大きな善であるのか，それとも大きな害悪であるのかは，適切な分配手段が見出されるかどうかという事情によっている。	482	13	348	3
727.	次のような問題があるであろう。すなわち，わが国が大きな生産力をもち，かつ現状のままの土地財産の分配を呈していて，そして国債によってもたらされている分配がないとするなら，いまと同じ刺激が富の増	483	24	349	8

	加にたいして働きうるか否かである。				
728.	いまだ国債に固有のただならぬ害悪が残っている。国債はやっかいでかつ危険きわまりない分配手段である。	484	9	349	15
729.	以上の理由から，国債を減らし，かつこれから先の国債の累増（growth）をはばむのが望ましいであろう。しかし大きな消費に慣れ親しんでしまうと，由由しき貧苦の時期を1度は体験しない限り引き下げることはできない。	485	10	351	1
730.	国債が完済されるなら，社会の残余の人々はより富裕になるのではなく，かえって貧困者（the poorer）になるであろう。一層大勢の労働者が路頭に迷い，またより多大な資本が国外へと流出するであろう。	486	6	351	9
731.	地主は多分もっと多数の僕婢を雇用するであろうし，また現況においては，このことが適用しうる最善の救済策である。けれども変化が生じれば，社会の構造はうんと堕落するであろう。	487	11	352	15
732.	資本家は課税を免れているにもかかわらず，その利潤は分配および需要の不足によって下落するであろうし，2，3年たてば，総生産物も減少するであろう。	487	26	353	5
733.	土地，労働，および資本を有している国は，たしかに以上の事態から回復していける能力をもっている。しかし一時期には終始大きな不景気(stagnation)に見舞われたことがある。それゆえとどのつまり，その国の資源を引き出すためには，不生産労働者の相当な1団を絶対に欠かせない。	488	9	353	12
734.	生産的階級と不生産的階級との間のもっとも望ましい割合は，国民的生産物に最大の交換価値をもたらすであろう割合である。そしてこの割合は生産力に応じて変動するにちがいない。	488	31	354	8
735.	**第10節　1815年以来の労働階級の貧苦への，先の諸原理のあるものの適用，ならびに概観**				

736.	労働階級の貧苦は資本の不足のせいにされてきている。資本は人口と比べるなら不足しているけれども，それにたいする需要との比較では不足してはいない。	490	1	356	1
737.	もしも1個の資本の4分の1が突如として破壊されたり，あるいはまた世界の別な地域に移送されたりするならば，利潤は高くなるであろうし，かつ貯蓄が必要な救済策となるであろう。	491	3	356	11
738.	あべこべに，かつては隆盛をきわめていた事業のいくつかの部門のつまずきによって，資本が減少するときには，利潤は低く，かつ貯蓄は必要な救済策とはならないであろう。	491	31	357	12
739.	現下のイングランドの状態は後者の事例にもっともよく類似している。イングランドはその資本を減少させてきているけれども，その収入ならびに生産物にたいする有効需要をなお一層減少させてきていて，利潤は低くてかつ期待できない。	493	5	358	13
740.	とはいえ利潤が低く，そのせいで資本が国外に流出しているにもかかわらず，貯蓄を奨励するというのは，人口が飲まず食わずで，おまけに母国を去っているのに，結婚を奨励する施策と同然である。	495	13	361	1
741.	わが国の目下の低利潤は貧弱な土地の耕作，重課税，および通商に関する制限のせいに帰されてきた。しかしわが国の貧苦についての理論がわが国の繁栄を説明する理論とは相容れないということを承認するのは難しい。	495	28	361	9
742.	上記の原因の帰すうがどうであろうとも，またそれらの原因がいまより数等びまんしていても，なおその国はいつもに比べてずっと盛況であったので，眼前の貧苦の直接の源泉はどこかよそに求めなければならない。	496	22	362	8
743.	乗り超えられない壁にとり囲まれている国は，たとえ貧弱な土地や租税を一切もたずとも，あるいは貿易に関するなんらの制限をまったく課していなくても，需要や消費の突然の減少によって似通った貧苦を味わうかもしれない。	497	7	363	1

744.	戦争以降のヨーロッパならびのアメリカの状態は，生産力を富の唯一の要素と判断している人たちの諸原理にもとづいては説明をなすことができない。	498	1	364	1
745.	通例説明されているように，戦争から平和への移行は，戦争以来引き起こっているのと同じくらい長期にわたる不景気の原因ではないであろう。けれども総消費(手稿では，「総需要」と変更されている，Pullen ed., *op. cit.*, Vol.II, p.286）がその供給と比べて減少してきたと想定すれば，そのことは原因であるといえるかもしれない。	498	28	364	14
746.	上記の消費の減少は別な国々においてはきわめて多様に作用してきているにちがいない。幾つかの国々では，それは疑いなく救済の役目を果たしたし，またほかの国々では，人々を貧困に陥れてきた。戦災をもっとも免れた国々は平和によってもっとも損害をこうむってきている。	500	17	366	9
747.	平和につきものである貧苦は1つの不幸な組み合わせである。しかしその貧困は，まぎれもなくそれと同等に戦争の終結と関連している特殊事情によって引き起こってきていることも想起しておかねばならない。	501	20	367	12
748.	消費のにわかな減少から肌身に実感されるであろう諸害悪があるがゆえに，よく推奨されてきた各年毎に戦争用の補給品を調達するという政策は，かなりまゆつばものであるであろう。	502	20	368	10
749.	たとえわが国が失った資本を回復するために貯蓄を余儀なくされているとしても，利潤が低く，かつ不確実であるなら，貯蓄は依然として求められる第1歩ではないであろう。	503	29	369	13
750.	わが国が求めているものは国民収入の増加，もしくはその総生産物の交換価値の増大である。これが達成されたあかつきには，その成果は貯蓄されるであろう。	505	1	370	15
751.	上述した収入の増加はどうすれば成就されうるのか，という問いかけにたいする解答が，本章の終わりの諸節において模索されている。	505	19	371	8

752.	ある収入の増加は資本が難なく収入にたいする割合を高めるようなわけにはいかない。	506	6	371	17
753.	目指すべき直接の目的を知るのはなお重要な事である。つまりそれを前へとおしすすめえないなら，それを遅らせないということである。	506	27	372	10
754.	通商にたいしてより大きな自由が与えられるや，きっと関税収入は減少していくであろう。フランスとの貿易が解放されれば，その永続的な結果はたしかに有益であるであろう。	508	1	374	1
755.	とはいえこの種の変化を待ち遠しいときにも，とくに絹貿易に適用することができるであろうアダム・スミスによる警告に注意を払っておかねばならない。	509	12	375	9
756.	なんらかの交易の開始は一時的には貧苦を生み出すであろう。それはその開始がしばらくの間は総生産物の交換価値を減少させるであろうことに起因している。けれども交易の拡張はなべてそれを増大させる。	510	11	376	6
757.	不生産的消費者が国富に及ぼす影響について1見識を具しているなら，細心の注意を払ってその影響を縮減しようとする努力に向かわしめるであろう。	511	1	376	15
758.	公共事業，道路の建設や補修，それに資産家たちがその地所を改良したり，ずっと大勢の召使いを抱えようとする傾向こそが，なしうる限りの労働需要を回復させるもっとも直接的な手段である。	511	18	377	9
759.	国民収入が増加され，かつ資財の利潤が騰貴してくるにおよんで，はじめて貯蓄を通して失った資本を補てんする活動に乗り出すのである。	512	13	378	6
760.	紙幣が続々と発行され，その結果わが国の収入はもっとも効率よく増加し，かつ消費とのつり合いを復しているであろう，多数の人々はこう判断している。しかしこうした見解は，その礎石を貨幣価値の下落がまねく結果についてのはきちがえにおいている。	513	7	379	1
761.	いまでは紙幣の大量発行は，それが戦時期にもたら	514	4	380	4

	した結果とはまったくちがった結末へと立ち至らさせるであろう。それは商品の供給過剰を増幅させるであろうし，たちどころに，利潤率の下落に拍車をかけて，資本家の苦境をさらに増長するであろう。				
762.	富の増進が比例のいかんにかかっているとする学説は，経済学という科学をさらにあいまいにするとして退けられるかもしれない。しかしそれが事実であるとわかれば，それだけでこうした異論にたいする十分な反論である。	515	9	381	6
763.	瞬時に富裕になるある通則を打ち立てることはまったくできはしないけれども，それでも需要および供給の大法則に注意を向ければ，おおよそ正しい方途に教導されるであろう。	515	26	381	16
764.	愛国心という手助けを借りなくても，国民資本の市場は充足されるであろう。また貯蓄の問題は安んじて個人の利害や感情から独立した作用に全面的にゆだねられるであろう。	517	15	383	10
765.	たとえ経済学という科学が，その性質からいって数学よりもむしろ倫理学ないしは政治学により類似しているとしても，それでもなおその原理の基礎を広範すぎるほどの経験に置いているなら，適用されても，われわれの正当な期待を裏切ることはめったにないであろう。	518	7	384	13
766.	本書の終わりの個所の諸学説が課税にとって好都合ではないかという別な異論がさしはさまられるであろう。しかしこれは正しい推測ではないであろう。	518	25	385	6
767.	たとえある事情の下において租税ならびに支出が富を増加するということを承認するとしても，富が一時的なものにすぎず，おまけにその増進の揚句の果てにも貧苦がつきまとうという場合には，こうした富は存在しなかった方がましであったであろう。	519	10	386	1

注

1）初版『原理』の索引は一応小林訳の中に訳載されてはいるけれども，そこでは語句がアルファベット順から五十音順に配列し直されたり，原典の事項がその原語のままではなく，便宜上大幅に短縮されて掲載されたりしている。このために，たとえば「娯楽（Comfort）」や「比例（Proportions）」といった重要項目などの備考部は一切割愛されてしまっている（小林訳下巻，巻末1－9頁，Malthus, *op. cit.*, pp.594, 599，なお索引の大半の訳は，スラッファ（Piero Sraffa）編　鈴木鴻一郎訳『リカードウ全集II』［雄雄堂，1971年］に収められている）。さらにここで小林訳の中には欠文が1つあったり（小林訳上巻326頁，吉田訳上巻404-5頁の1節が脱落している，Malthus, *op. cit.*, p.221），また原文の文節の変更に対応した改行が施されていない個所もあるということをも確認しておきたい（小林訳上巻51頁13行目，吉田訳上巻57頁11行目，Malthus, *op. cit.*, p.30）。

2）ただし初版『原理』の大部を和訳している吉田氏の手になる別な訳書〔T．R．マルサス著吉田秀夫訳『経済学原理』（松柏館書店，1934年）〕には，「概要」の抄訳が編集上の都合でそう入されてはいる（同訳書1－5，172-3，199-200，241-3，244-5頁）。

3）吉田同上訳書訳者序文2頁。なおこのゆえにたとえばリカードウ（David Ricardo）は『マルサス経済学原理評注』を執筆するさいに、この「概要」を大いに利用したとされている（小林訳下巻訳者解説417頁，スラッファ編鈴木鴻一郎訳『リカードウ全集II』5-8，10-3，16，28-9，30-1，32-3，47，230-1，232，233-4，240-1，254，283，285-6，289-91，293，317-9，319-21，322-3，377，378，381，382-3，419，426-7，432，435，437-8，439，454，474-5，484，486-7，489-90，491，508，551-2，553，554，555，557，561-2，567-8，569-70，571，576，578頁）。

4）プレン著溝川・橋本訳『マルサスを語る』（ミネルヴァ書房，1994年）72頁。

5）プレン同上訳書69頁。

6）そのさいに必要な文献上の整備は，J.M. Pullen ed., *T.R. Malthus Principles of Political Economy,* 2 vols. (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1989）において十全である。

7）P．スラッファ編中野正監訳『リカードウ全集VIII』（雄松堂書店，1974年）124，151頁も参照。

8）同上訳書74-5頁。

9）Salim Rashid, "Malthus' Principles & British Economic Thought, 1820-1835", *History of Political Economy,* Vol.13, No.1 (Spring, 1981), p.60.

10）プレンはこの点について，「概要」には第2版『原理』「では使用されるが，第1版では使用されなかった節の見出しが含まれている」と説明している（プレン前

掲訳書69頁）。

11）Pullen ed., *op. cit.*, Vol.II, p.285.